

目次

序文
目次

I 章 キリスト教と歴史 ——— 5

中世までの礼拝堂

ユダヤ教の神殿と会堂	—— 7
初代教会 AD~	—— 9
家の教会 カタコンベ	—— 11
集中式礼拝堂	—— 13
バシリカ Basilica	—— 15
修道院の礼拝堂	—— 17
大聖堂 Cathedral	—— 19
中世の礼拝の特色	—— 21

プロテスタント教会の礼拝堂

宗教改革	—— 23
ドイツ・オランダ・イギリス 1	—— 25
ドイツ オランダ イギリス 2	—— 27
アメリカ 1	—— 29
アメリカ 2	—— 31

II 章 日本風土と教会 ——— 33

日本的なるもの

い	日本化 風化	—— 35
ろ	人間中心主義 恥意識、罪意識	— 37
は	死者なき風土	—— 39
に	ふるさと	—— 41

現代的なるもの

A	「第四の人間」の出現	—— 43
B	世俗化現象	—— 45~47
C		
D	状況の倫理	—— 49
E	閉ざしつつ開くことの意味	— 51

教会的なるもの

1	日本宣教	—— 53
2	都市伝道	—— 55
3	福音の土着化	—— 57
	福音と文化との出会い	—— 59

II プロジェクト — 61

計画

1	—— 63
2	—— 65
3	—— 67
4	—— 69
5	—— 71
6	—— 73
7	—— 75
8	—— 77
9	—— 79
10	—— 81
11	—— 83
12	—— 85
13	—— 87

結び

—— 89

I 章 キリスト教と歴史

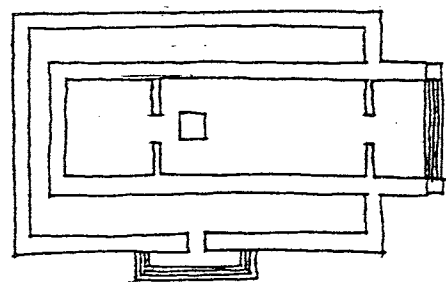
ユダヤ教の神殿と会堂 BC

ユダヤ教はバビロニア、エジプトなどの異教との接触を持つもので、ユダヤ教の礼拝所もその独自なものだけでなく異教の影響を受けた跡をとどめている。ユダヤ教の礼拝所には神殿と会堂（シナゴグ）との2種類がある。神殿は唯一エルサレムに存在するだけであるが、会堂はユダヤ教徒の住む町、村に無数に存在するものである。会堂はBC10ころにはパレスチナ全土はもとより地中海沿岸の諸地方にひろく広がっていて、キリスト教伝播の足台となったことは使徒行伝の記事にもあらわれている。

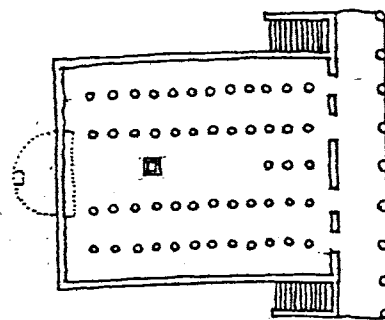
エルサレム神殿はソロモン王が初めて建設したものであったが、BC 568年、バビロンに破壊された。捕囚期後再建され、さらにヘロデ王はこれに増改築を加えた。これを第二神殿と呼

ぶのであるが、規模、様式などにおいて、ヘロデ王のものは前のものとは全然別物であった。ヘロデ王がこれに着手したのはBC20年で、完成したのはAD68年と言われ、しかもAD70年にはローマ軍によって完全に破壊された。しかもその後は神殿は建てられることなく今日にいたった。

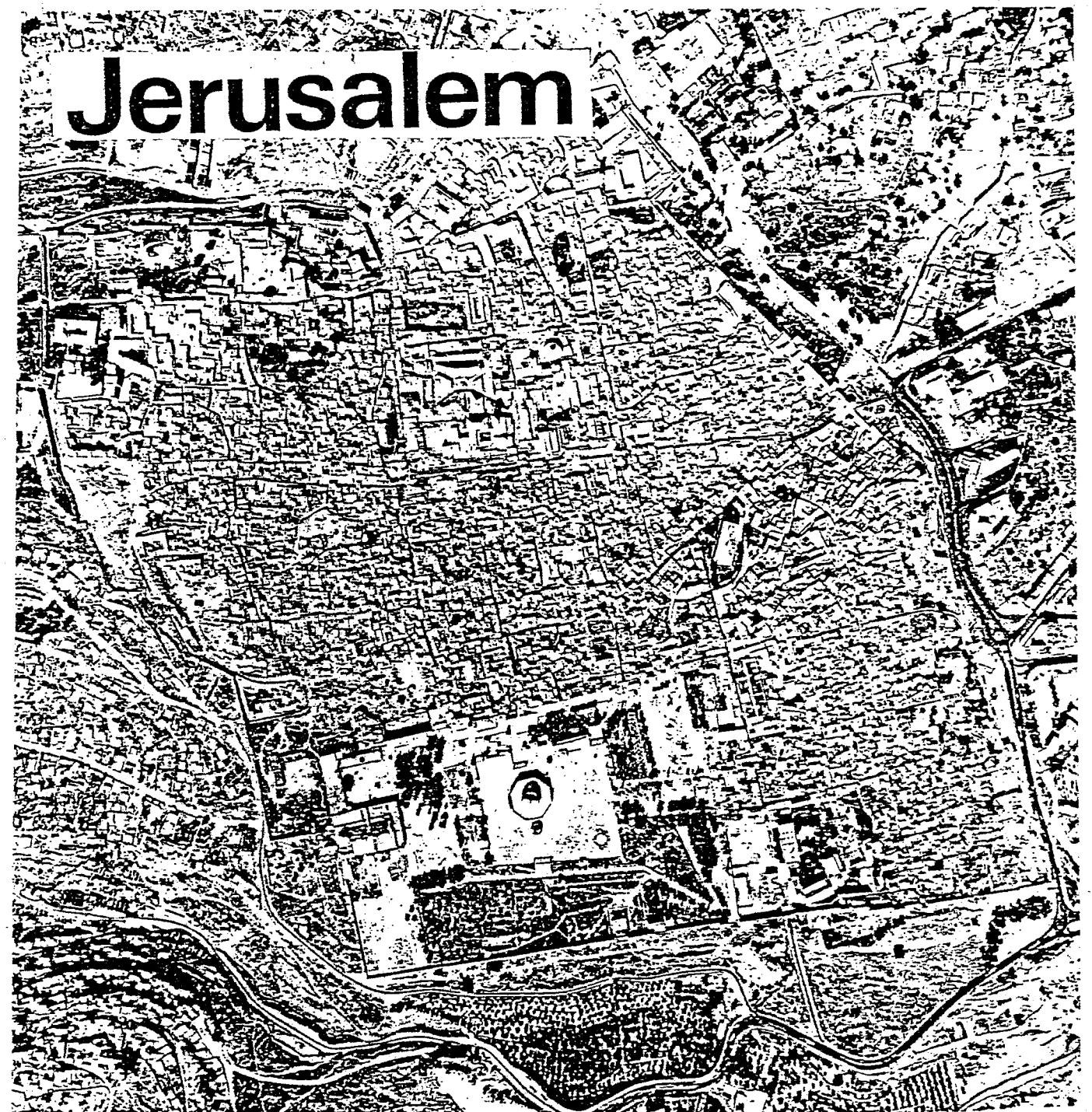
イスラエル民族がバビロンに捕囚となっていた時代（BC586～535）に、神殿に代わるものとして発生したものとされている。そしてこの会堂が日常の信仰生活の中心となったのである。そこでは日ごとに律法が読まれ、教えられ、祈りがささげられた。会堂は日常の礼拝の場所であるとともに、信仰の養われる場でもある。



ユダヤ教の神殿



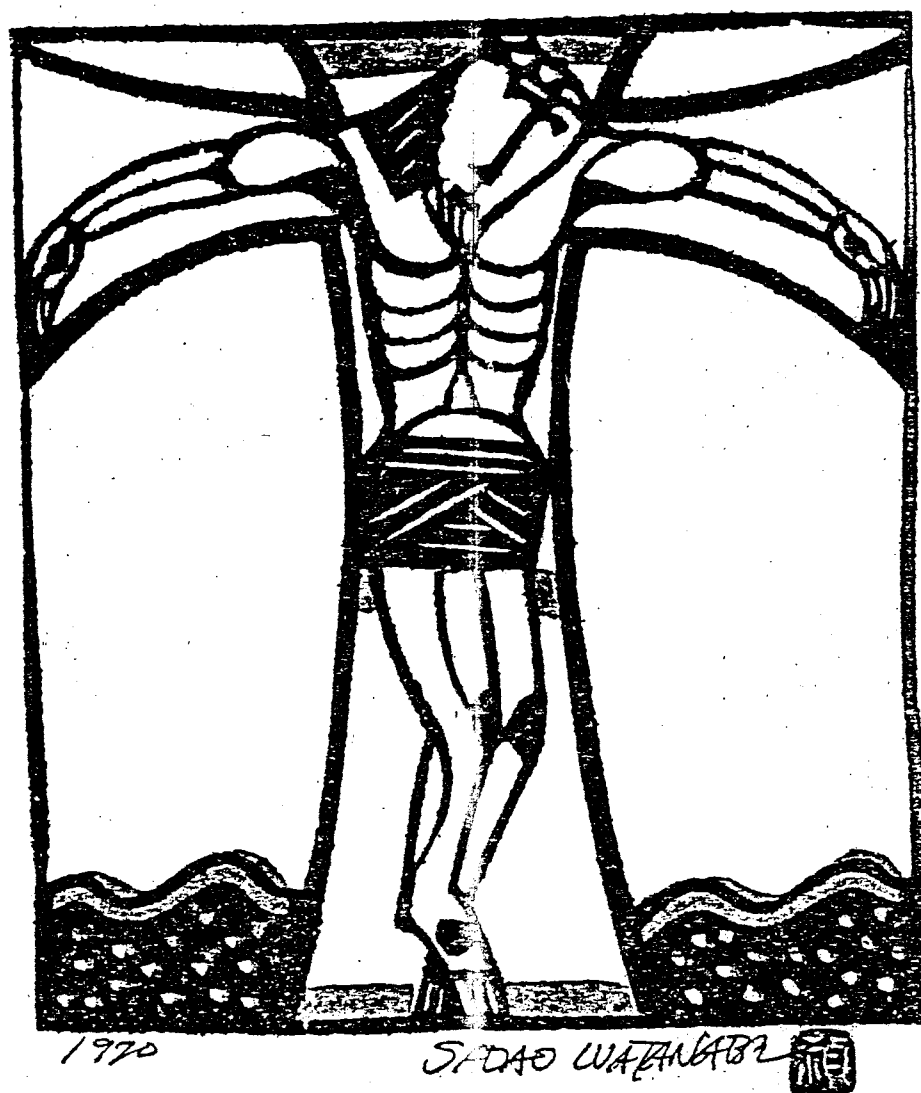
シナゴグ



初代教会 AD~

イエスキリスト御自身、その人の中に、その生涯と十字架の死とによって人間を生ける神に和解させ、神と交わりうるものとする贖罪の犠牲が、また賛美と礼拝の犠牲が完成されたのである（ヘブル7・8章）。すなわちエルサレム神殿で行われた犠牲は、イエスキリスト、その人の中に完成された。したがって彼自身が大祭司であると共に、犠牲そのもの（神の小羊、ヨハネ1・29、1コリント5・7）である。すなわち彼は、その人の中に聖所（神殿と会堂）のすべての機能を総括して、これを完成したのである。「宮よりも大いなるものがここにいる」 マタイ12・6 「この神殿をこわしたら、わたしは3日のうちにそれを起こすであろう」 ヨハネ2・19

イエスの肉体は十字架に死に、復活のキリストは彼を信じる者の共同体の中に生きるものとなった。「ふたりまたは3人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」 マタイ18・20 このようにして、イエスキリストの名を信じ、聖霊の導きを受ける群れ、すなわちキリストの教会そのものが神の住みたもうところ、新しい神の宮となったのである。



「言は肉体となり、わたしたちのうちに宿った」
ヨハネ1・14 神は住むための建物を必要とせず、キリストのからだである教会という共同体そのものの中に存在するのである。この教会は、復活の喜びと再臨の希望とに満ちてみことばをきき、主の晩餐にあずかるために集まり、そこに神の宮を成立させたのである。したがって最初の教会は、古い会堂、屋外、海辺、川のほとり、個人の家などいたるところで礼拝を行なったのである。

新約聖書時代の教会の礼拝は多くの古いものを受け継ぎながら、本質的にはまったく新しいものであったことが明らかになるであろう。



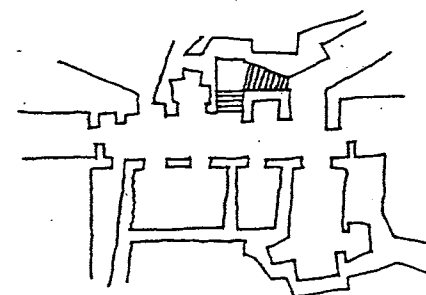
家の教会 カタコンベ 1C~4C

1Cから4Cの初め頃に至るまでの教会は、ローマ政府によってくり返された迫害の下にあった。時と所によって、迫害の程度に相違があって、ある場合は公然と教会の礼拝を行なうことが可能であったが、一般的にはひそかに隠れた場所で、しかも生命を賭けて行われねばならなかった。信徒の所有する比較的大きな家やカタコムなどが隠れた礼拝の場となり、聖餐の机などにも日用の食卓が転用された。礼拝の形式も流動的であって、まだ個定化されず、礼拝の場の配置も一定の型はなかった。そして3、4Cに近づくに従って、各地方の教会はその地方の事情に従ってある程度の変化をもちつつ、礼拝の形式が個定化されてゆき、このような時期の中で後の時代にまでその跡を残すような礼拝と礼拝所との基本的な型が作られていったのである。

最初の教会は、ユダヤ人の会堂で公然と礼拝を行っていたのであるが、まもなくそこから離脱して、教会独自の礼拝がなされるようになった。この場合、教会は礼拝と礼拝所の独自の形式を創始したのではなく、異教の神殿、ユダヤ教の会堂、一般市民の家屋などの形式がある程度採り入れられた。



家の教会は1934年、ユーフラテス川の上流、シリアとイラクとの国境近くにデュラ・エウロポスの遺跡で発見された。家の教会の礼拝の場として使用されたものは信者となった貴族、富豪の住宅であった。今日までの研究によると、ローマ市内にはコンスタンティヌス大帝以前に20以上の教会堂があったといわれ、同じ頃シリアや小アジアにも多数の教会堂が建っていたが、それらの多くがディオクレティアヌス帝の迫害で破壊された。このような迫害の時期に教会堂建築が発展するということはありえなかった。信者たちはカタコンベと呼ばれる地下墓室の中にひそかに彼らの礼拝所をもうけて、そこで信仰を守りつづけた。カタコンベは地下に掘られた坑道のような廊下である。このことからわかるように、その時代その時代の情勢によって礼拝の形態、また形式も変わるのである。しかし、イエスキリスト信じるという信仰、つまり本質はここまでにおいては変わっていないと言ってよいだろう。



カタコンベ

I 中世までの礼拝堂 4

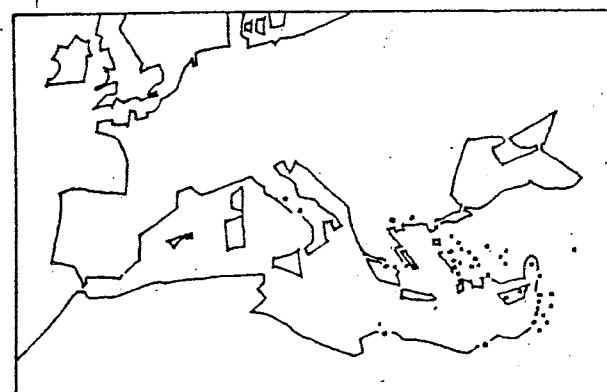
バシリカ Basilica 4C～

AD313年、コンスタンティヌス帝のミラノ勅令によってキリスト教信仰の自由が保証され、キリスト教会の長期にわたる苦難の時代は終わった。それまでひそかに礼拝していた教会は、この時より公然と礼拝するようになった。そして皇帝自ら教会堂を献納した。

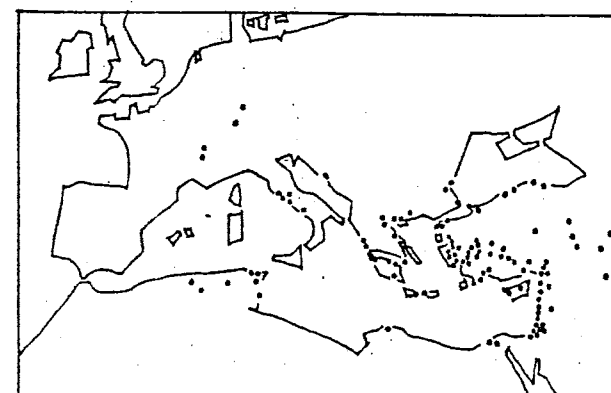
この時代の礼拝堂は主としてバシリカ式であった。バシリカはローマの法廷の形式を採り、外観はギリシャ神殿にならっていて、都市の広場と結びつき、社会的、商業的な集会の場所として用いられていた。

こうしてバシリカ式教会堂は、コンスタンティヌスの時代には地中海の東西にわたってひろく行なわれていた。その内部は縦に並んだ円柱の列によって、3つの部分に分けられているのが基本的な形式であったが、それが5つに分けられているもの（五廊）あるいは7つに分けているもの（七廊）、そして9列に分かれているもの（九廊）まで出現し、本来半円形であった後陣も多角形のもの、あるいは副後陣を左右にもつものなど、バシリカ形式という基本形の中での多様な変化が現われるようになった。

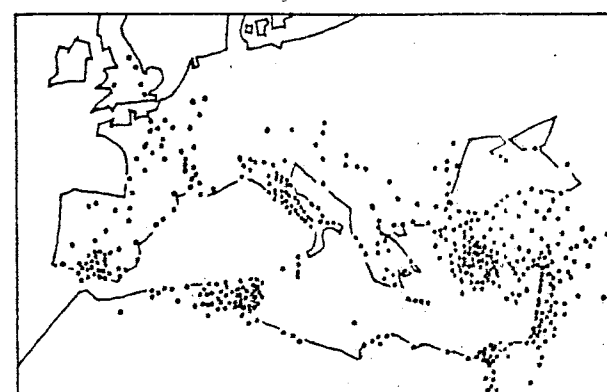
そして、礼拝堂は祭壇が東に位置するように建



◀ 一世紀の教会

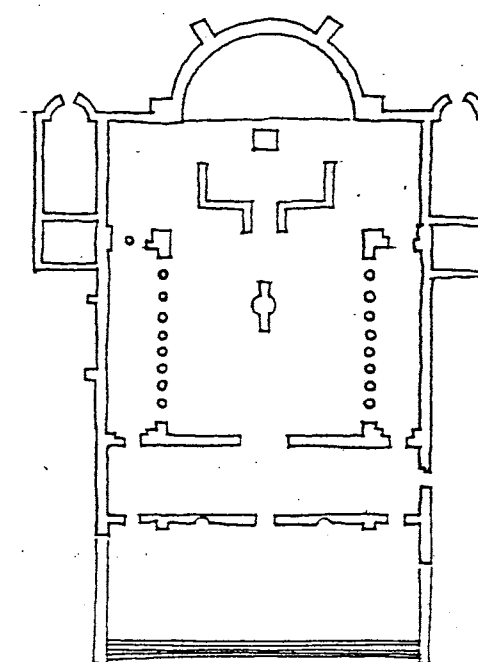


二世紀の教会 ▶



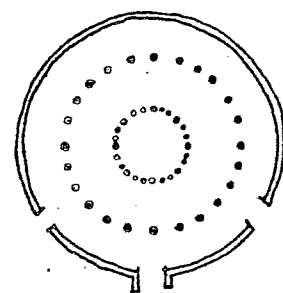
◀ 三世紀末の教会

てられた。義の太陽である復活の主を会衆が仰ぎ迎える意味であろう。場所への神聖観が現われている。このように、建物の方向を東に向けて決定することからオリエンテーション・orientationという用語が生まれた。

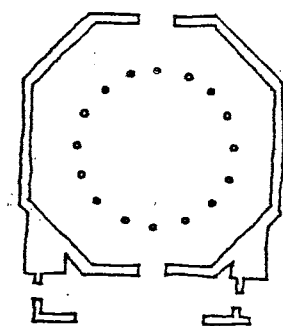


五世紀 バシリカ式教会堂

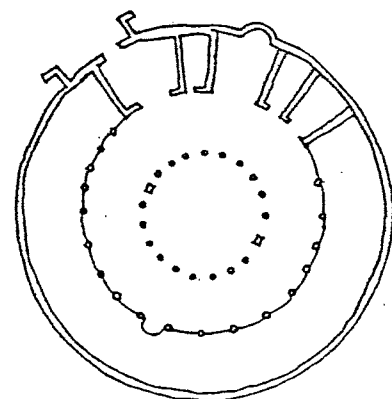
殉教者記念の礼拝堂は、円形または多角形の集中式の建築であった。これと同様の形式を持つものに洗礼堂がある。洗礼は、3世紀末ごろまでは一般に川で行なわれたものである。コンスタンティヌス帝時代より、礼拝堂が建築されるに至ってから、礼拝堂とは別に洗礼堂が建てられ始めた。その場合、殉教者記念礼拝堂と同じ形式が選ばれたことは偶然ではない。洗礼は死と復活とに深いかわりがある。洗礼において信徒は死し、葬むられ、そしてキリストと共に復活する（ローマ6・3~4）。したがって円形は新生の母胎を、8角形は復活を象徴するものとして、これらの形式が選ばれたものと考えられる。洗礼堂の中央に、床面より地下に数段降りて洗礼のための水槽が設けられている。受洗者は墓に降り、しかして新しい生命に甦って段を昇るのである。殉教者礼拝堂、洗礼堂はいずれも少人数しか収容できぬものであった。それが建築技術の進歩によって、多人数の収容を可能にするだけの広さを持つものが建てられるようになった。そして会堂をいっぱいにおおる荘厳華麗なムード（丸天井）のあるビザンチン時代の特色のある礼拝堂が建築されたのである。エルサレムの聖墓礼拝堂、昇天礼拝堂は、前者は



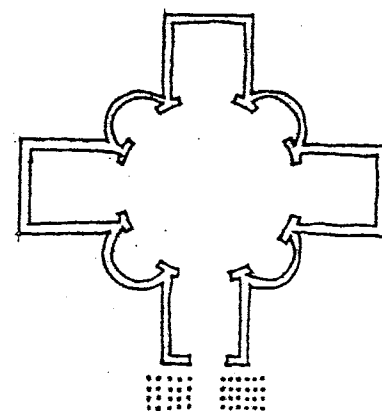
(1)



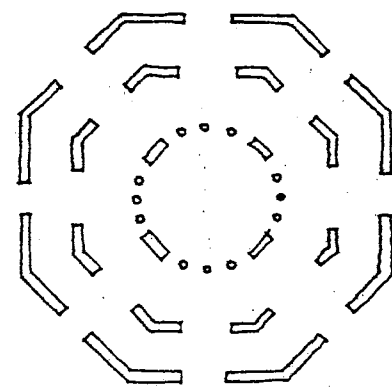
(2)



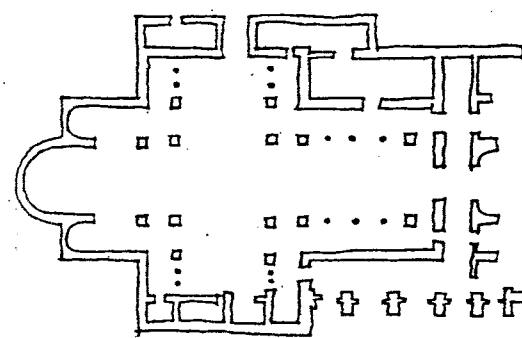
(3)



(4)



(5)



(6)

円形、後者は8角形の建物である。これらは4世紀のもので、まだ規模は小さい。聖墓礼拝堂をモデルにして建てられたローマの聖ステパノ円形礼拝堂（5世紀）は規模も大きくなっている。この他8角形を基準にして十字架を採った小アジアのナジアンズス礼拝堂、エルサレムのクバッド・アッサカラの8角形の礼拝堂などがある。またもっとも有名なベニスのサン・マルコ教会は十字型の集中礼拝堂である。これは9世紀に建てられたものが、11世紀、15世紀に2度改築され、今日まで残っている。一般に円形、8角形の礼拝堂は西方教会に見られ、その数は多くはない。東方教会ではむしろ正方形のものが好まれ、これは東方教会の礼拝堂建築の基本となった。

- (1) エルサレムの聖墓礼拝堂
- (2) 昇天礼拝堂
- (3) 聖ステパノ円形礼拝堂
- (4) ナジアンズス礼拝堂
- (5) クバッド・アッサカラ礼拝堂
- (6) サン・マルコ教会

I 中世までの礼拝堂 6

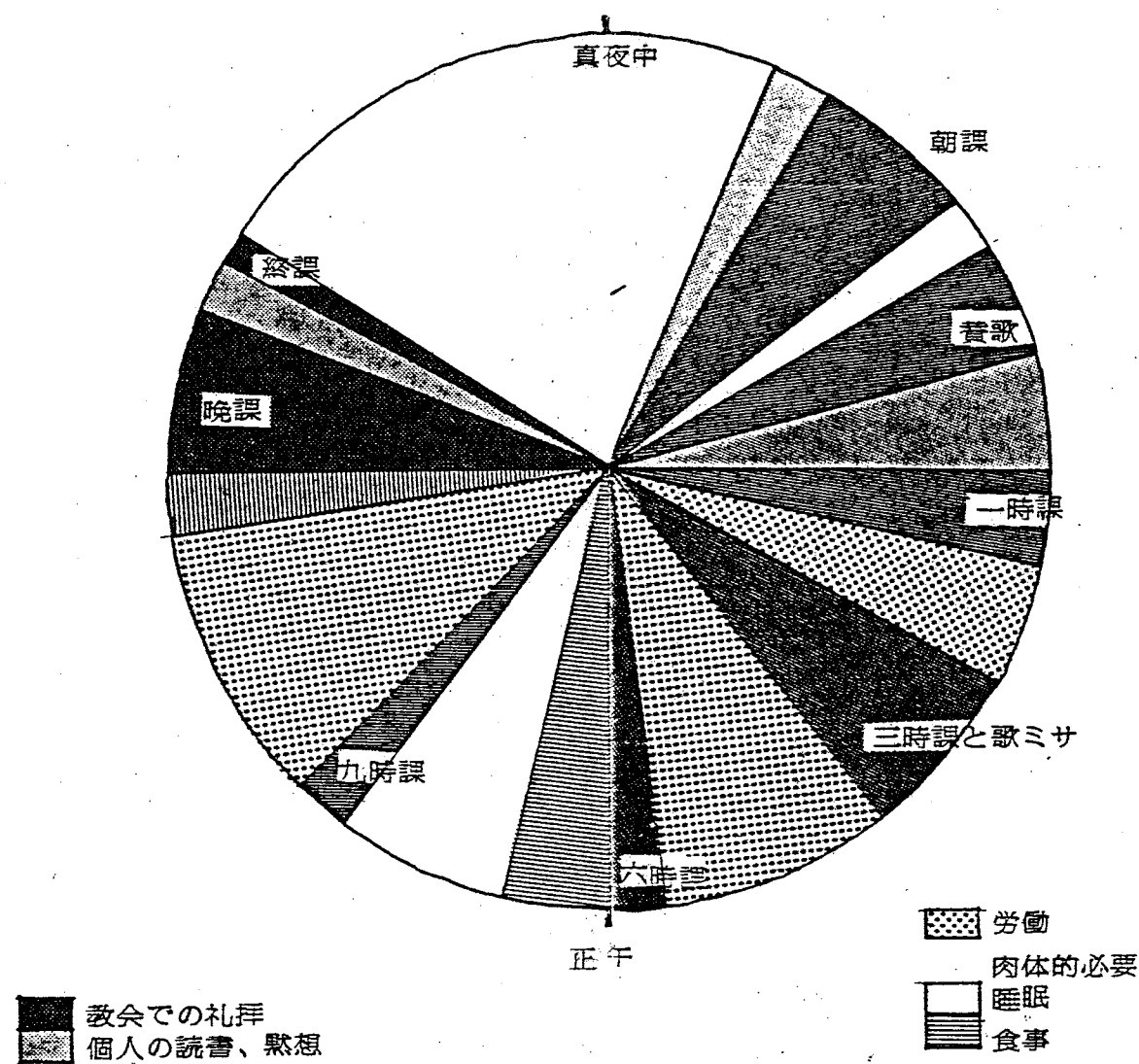
修道院の礼拝堂

中世に至るまでに、礼拝堂の様式は大きく変化していった。建物の形全体から言えば、すでにバシリカにおいても見られるものであるが、十字架形を採ることが基本形となった。しかも東方教会のギリシア十字形と違って、縦に長いラテン十字形が採られた。したがって建物は縦に長いものとなった。そしてこの縦長の建物が厚い壁によって内陣Chancelと身廊Naveとに画然と仕切られたのである。内陣には聖所Sanctuaryと聖歌隊席Choirとがあり、聖職者の席Presbyteryと聖歌隊席だけが設けられ、一般信徒はこの場の外、すなわち身廊Nave、翼廊Transept、側廊Aisleなどにとどまらねばならなかった。祭壇はもとは内陣の中央か、むしろ身廊に近く設けられたものであるが、中世紀にはすべて内陣の奥、司教の座のあった場所に移されていったのである。これらは中世紀の教会の礼拝観が、初代教会より大きく変化したことを示す。

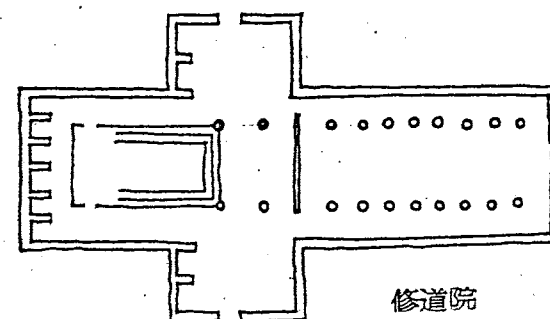
中世紀のもっとも重要なタイプの一つは、修道院の教会である。それは修道院の日々の勤めに適用するように設計されている。修道院の日々の勤めに必要なものは聖歌隊の席であって、内陣の両壁に沿って平行に、向かい合って造られている。

修道士の1日

西ヨーロッパ諸国の修道士たちは、このような日課を実行した。これらは、季節により、あるいは修道会の伝統によって少しずつ変っていた。



これは、聖歌を交互に歌うのに便利である。向かい合った席の中間に、聖書日課を読む朗読台Ambo、Lecternがある。聖歌隊席の東端に聖職者の席が設けられている。日々の勤めではこの内陣だけが用いられ、内陣は、教会堂の中の礼拝堂である。翼廊、身廊は特別に信徒の出席する礼拝が行なわれる時だけ、信徒の場として用いられる。したがってその部分は多くの場合広くない。修道院では夜半にも礼拝があるので、暖房装置もない時代であるから、隙間風を防ぐために内陣の周囲が高い壁で囲まれた。これはけっして、信徒の礼拝者をしめ出すというわけではなかった。けれども内陣はもっとも重要な場、聖なる場とされ、それにふさわしい装飾も施された。翼廊に向かって通路があいていて、そこを通過して、礼拝開始の際の行列が行なわれる。翼廊や身廊の一部に補助的な祭壇がいくつも設けられ、修道僧は個人的にそこでミサを唱えるのである。



I 中世までの礼拝堂 7 大聖堂 Cathedral

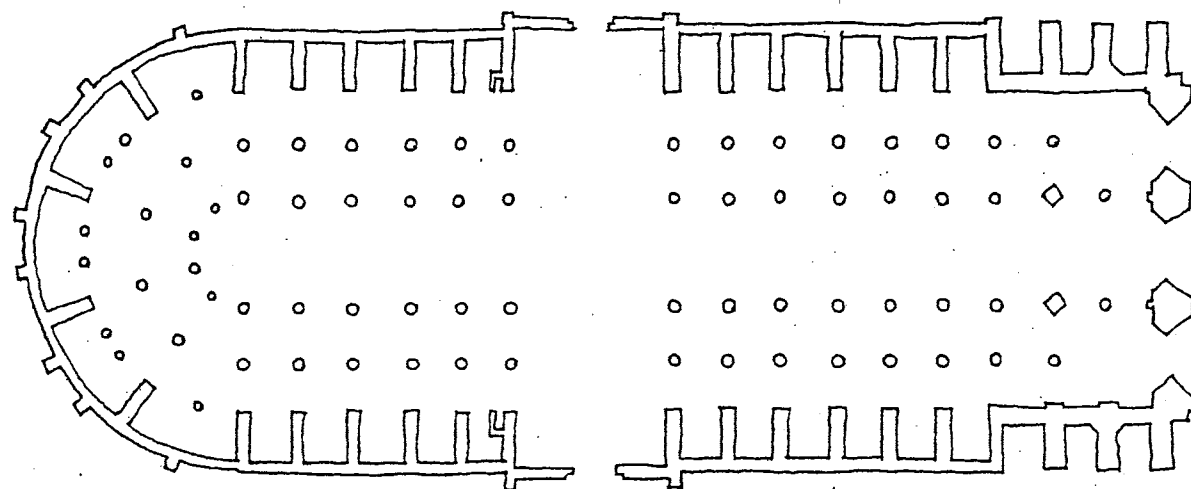
司教Bishopは2世紀ごろは各教会に一人ずついて、その教会を主宰したものである。4世紀ごろから教会の数が増加し、司教は一地方の多くの教会を管理するようになった。すなわち一管区の管轄者となったのである。そしてこの司教の所在する教会が、その管区の母教会となり、大聖堂Cathedralと呼ばれる（Cathedraは司教の座の意）。大聖堂は封建社会を背景とし、圧倒するような威厳と荘厳さをもって建てられた豪荘建築であった。大聖堂の礼拝は通常、その職員である修道僧やその他の聖職者、聖歌隊だけで行なわれ、一般信徒は必ずしも出席しない。

身廊Naveの語源はnavis船を意味している。

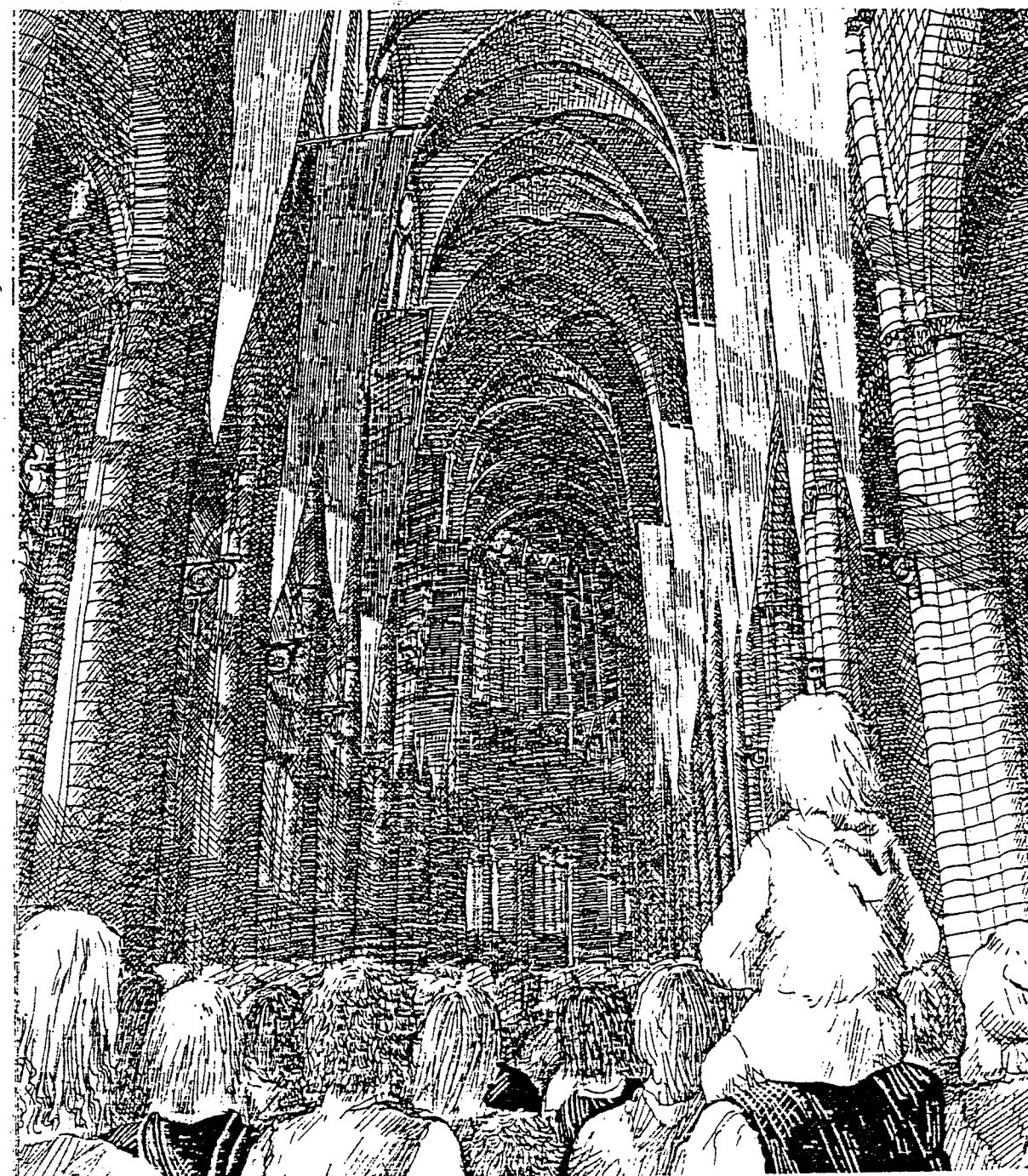
身廊の天井が船の竜骨に似ているためであるとの説もあるが、むしろ初代教会では教会が船で象徴されたことによるものである。ヒッポリタスは「世界は海であり、教会は其中で船のように波に打たれる。しかし沈むことはない」と書いている。教会堂の外観も船に模して建てられたものと言われる。

側廊には多くの小礼拝堂が付属している。この他本堂に付属して回廊Cloister、僧会室Chapter Houseなどがある。

洗礼堂Baptisteryは14世紀ごろまでは本堂とは別に建てられたものであるが、しだいに礼拝堂の西側、入口近くに洗礼盤Fontが設けられるようになった。



パリのノートル＝ダム大聖堂



I 中世までの礼拝堂 8

中世の礼拝の特色

中世の礼拝に現われた特色の一つは、キリストの犠牲が強張されたことである。初代教会の礼拝は、復活の主とまみえ、主の恵みによる罪の赦しの確信と栄光の主の再臨の待望とによって歓喜にあふれたものであった。しかるに、中世の礼拝においては、その中心が復活の主から十字架の主への救いを求めることが礼拝の中心となった。初代の歓喜にかえて、そこでは罪の悔恨の苦悩が支配している。初代教会では、主のテーブルを囲み、感謝と喜びとをもって復活の主と共に食卓につくの反して、中世の教会では、聖なる祭壇から遠く離れてひざまずき、血のしたたる十字架の犠牲を心に抱いて、ざんげと善行とのゆえに赦しを乞うのである。

中世の教会の礼拝の変化は、教会の体質の変化と封建社会の反映などによるところが少なくない。初代教会においては、迫害の時代でもあり、キリスト教徒は、その社会の中の少数者であった。したがって、信徒となるために訓練も受け、教会員相互の間も親密であった。しかるに、キリスト教信仰の自由が認められ、続いてローマの国教となるに及び、教会や信徒の数は急速に増加し、それに反比例して信徒の質は低下し、

教会の中に異教的な要素が多く入りこんできた。一方聖職者は、ただ教会のわざにたずさわるだけでなく、一般の政治の面にも関与し、社会にけるもっとも有力な階層を作るものとなった。このような事情は教会の礼拝の中に著しくあらわされていった。

礼拝堂が大きく2つの部分、すなわち内陣と身廊に区分されていることは、その形式に関するかぎり、初代教会の原則を継承したものである。初代教会の原則に従えば、内陣は聖餐の場、身廊はみことばの礼拝の場であるべきである。しかし中世においては、礼拝のすべての中心は内陣の中に置かれ、しかもそこは聖なる場所であって、聖職者と少数の特権階級だけによって占められるものとなった。一般信徒大衆は厚い仕切り壁を隔てて身廊にとどまらねばならない。そこからは、仕切り壁の中央の通路を通して、はるかに祭壇を見ることができくらいで、祈りも聞けなければ、無知なる信徒はラテン語で読まれる聖書を理解することもできない。信徒が聖餐にあずかるのは、年に一度くらいであった。全教会が積極的に礼拝に参加するという初代教会の共同礼拝から、信徒はその場を退いて、

消極的、傍観的立場に置かれたというのがこの時代の礼拝の特色である。しかしながら、信徒は礼拝において完全に除外されたかと言えば、必ずしもそうではない。信徒は礼拝の行なわれる間、身廊にあって、自らの祈りを敬虔にささげる。身廊の周囲の壁は、使徒や聖者の画像で埋められ、窓のステンド・グラスには聖書の物語が描かれ、これらは信徒各自に語りかける信仰の言葉であった。しかし、これから受ける信仰の内容はまったく同一のものではない。個人の信仰によって内容、度合いは異なってくる。それは敬虔なものであるとは言え、主観的な性格が強くなる。ただ一般的には、信徒は人間の罪の深さと審判の怖ろしさに責められ、はるか

に主の犠牲の祭壇を望むのである。このように礼拝堂は、主のからだである教会が行なう共同の礼拝の場としてではなく、一般信徒にとっては、各個人の信仰を育て養う場という性格を持つものになった。このようにして教会の礼拝は、共同的なものから個人的なものに、客観的なものから主観的なものに変質していった。それゆえに、宗教改革者たちは、共同的礼拝の復興に最大の努力を払ったのである。

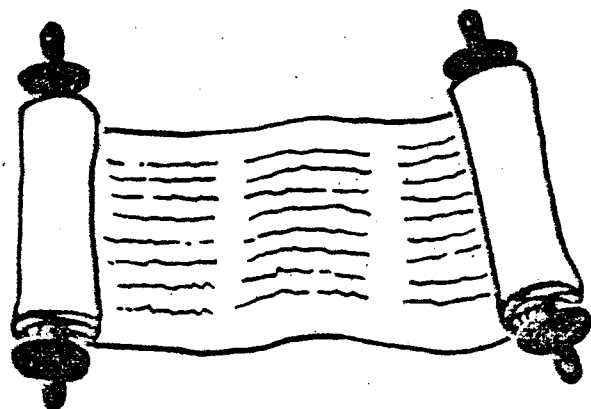
中世紀においては、教会はその地域社会の生活の中心になっていた。そこで礼拝することだけでなく、社交的、職業的交際もそこで行なわれ、死後は礼拝堂の床の下に埋葬された。



宗教改革

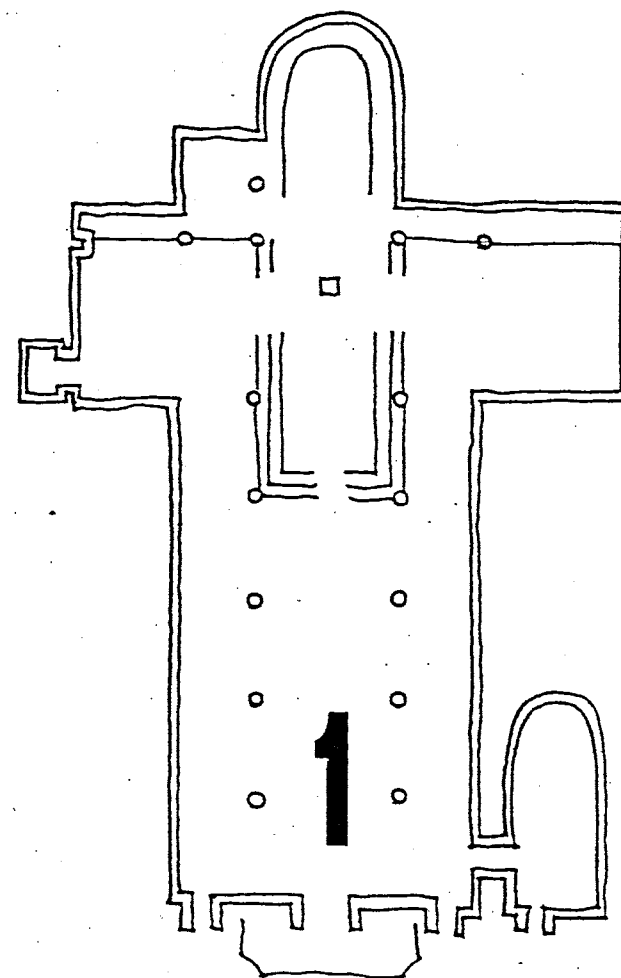
宗教改革者の神学は聖書の權威に基づくものであった。教会の本質も、教父の伝承のみに拠らず、聖書そのものに立ち帰って追求された。そして中世の聖職制度を排し、教会は聖職者と信徒とが一つになって構成するキリストのからだであることを再確認した。信徒は日常の仕事の中で神に仕えるものであって、それは聖職者が日々の務めをするのとまったく同じものである。聖職者、信徒の区別なく、万人が祭司である。したがって教会の礼拝は、全教会が共同的に行なう教会のわざであることが強調された。

宗教改革の指導者たちが、礼拝において説教の地位を重んじつつも、同様に聖礼典を軽んじることなく、正しく福音を宣べ伝えた。それが

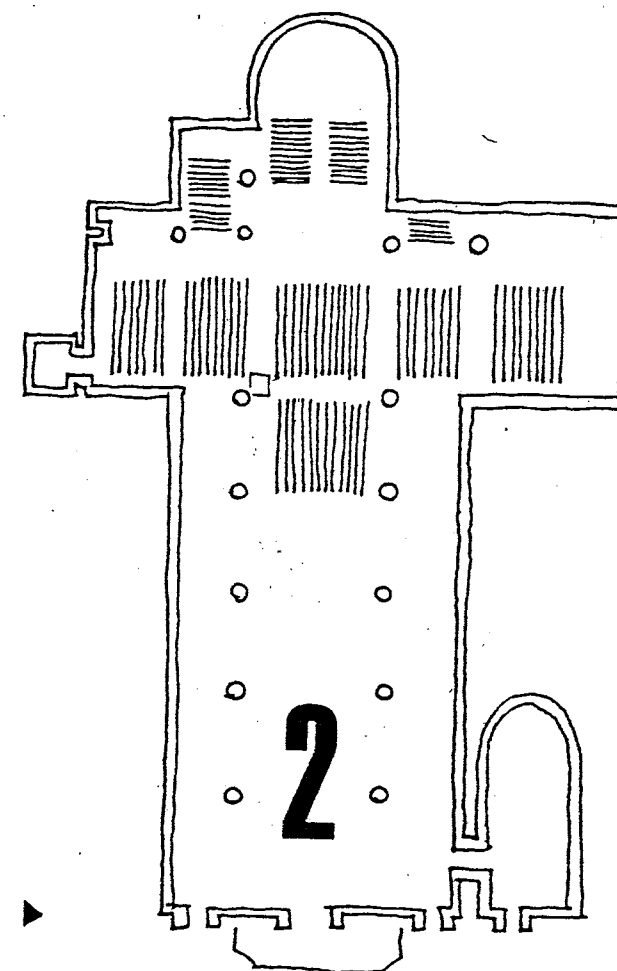


礼拝堂建築の上に明確に表現されねばならなかった。

宗教改革当時の問題は、新しい礼拝堂を建築するというよりも、むしろ、古い礼拝堂を転用して、プロテスタント教会の礼拝に適するように改装することであった。過激な改革運動が行なわれたところでは、聖像がとり除かれるだけでなく建物までも破壊された。スコットランドには破壊された修道院や教会の残骸が今日もそのまま保存されている。しかし建物まで破壊したものはごく一部であって、一般的には古い礼拝堂が転用されたのである。スイスのチューリッヒでは、シヴィングリーの指導の下に二週間内に礼拝堂の改装が整然と行なわれた。英国領土内でプロテスタント教会に転用されたものは9000以上も現存している。ゼネバの聖ピエール Saint・Pierre の大教会 (<1> が改革前、<2> が改革後) はルード・スクリーン (仕切り壁) や司教の座 (B)、聖歌隊席は全部とり払われ、身廊の北側に説教台 (P) が高く設けられ、聖餐式のある時だけその前に聖餐卓が置かれた。



◀ 1) 宗教改革前



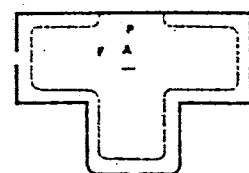
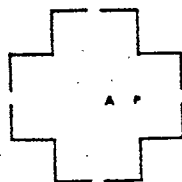
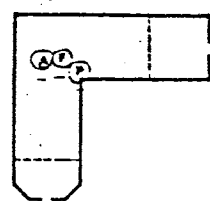
2) 宗教改革後 ▶

プロテスタント教会独自の礼拝堂が建てられ始めたのは17世紀以後である。戦争、大火などのため、礼拝堂の復興、都会の膨張、新都市の誕生による礼拝堂の新設などの他、この時代より新しく教派が生まれ始め、それぞれの特色を表わした、多種多様の礼拝堂が出現した。意欲的に創意くふうがこらされて、その多様さに目を見張らされる。18世紀に移ると豪華さがこれにつけ加えられていった。

ドイツ

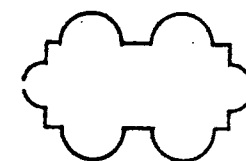
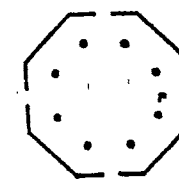
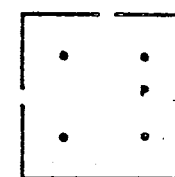
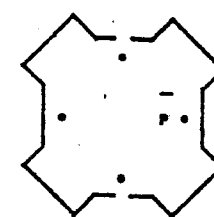
ドイツのプロテスタント礼拝堂は保守的傾向が強いが、それでも新しく開拓された面も現われている。ドイツから北欧にかけて、この時代におこったバロック建築Baroqueが多く採用された。その特色はドラマティックという言葉であらわされている。礼拝の中心となる部分がドラマティックに強調されている。高窓から差しこむ光線が祭壇に注がれ、説教台には彫刻が施され、しかも金ピカである。オルガンもぜいたくに装飾されている。この時代の礼拝堂に新しく二階席が現われ、これがプロテスタント礼拝

堂のひとつの特徴となっていた。18世紀にかなり多く現われたものにT字形礼拝堂がある。会衆は三方から中心に向かって着席する。説教台は祭壇の後に、高く上げられている。説教台の場を除いて堂内のぐるりに二階席が設けられている。この他ギリシア十字形のもの、八角形のもの、円形のものなど多種多様である。いずれも集中主義がとられ、礼拝の中心に向かって、これを囲むように会衆席が設けられ、最大限に多数の会衆が、礼拝の中心部がよく見られ、すべての言葉がよく聞かれるようにということが求められている。



オランダ

オランダのプロテスタント教会は、カルヴィンの系統に属する改革派である。礼拝堂にもルター派とは異なったものが現われている。一般に礼拝堂内はシンプルで、ぜいたくな装飾は避けられている。ただ説教台とオルガン・ケースだけが美しく飾られている。説教台の上にはサウンディング・ボードと呼ばれる大きな天蓋のようなものがある。これは一種の拡声器であるが、同時に説教台に威厳をつけるものとなる。実にオランダでは、説教台だけが礼拝の中心であるような感じを与えられる。聖餐式にあたっては、身廊の中央か側廊に長い食卓が特設されて、信徒は食卓に着席して聖餐にあずかるのである。会衆は説教台を中心にできるだけそれに接近して、牧師を見、またその声を聞きうるようにということに重点が置かれている。この原理を最大限に応用して、種々なる形の礼拝堂が現われた。



イギリス

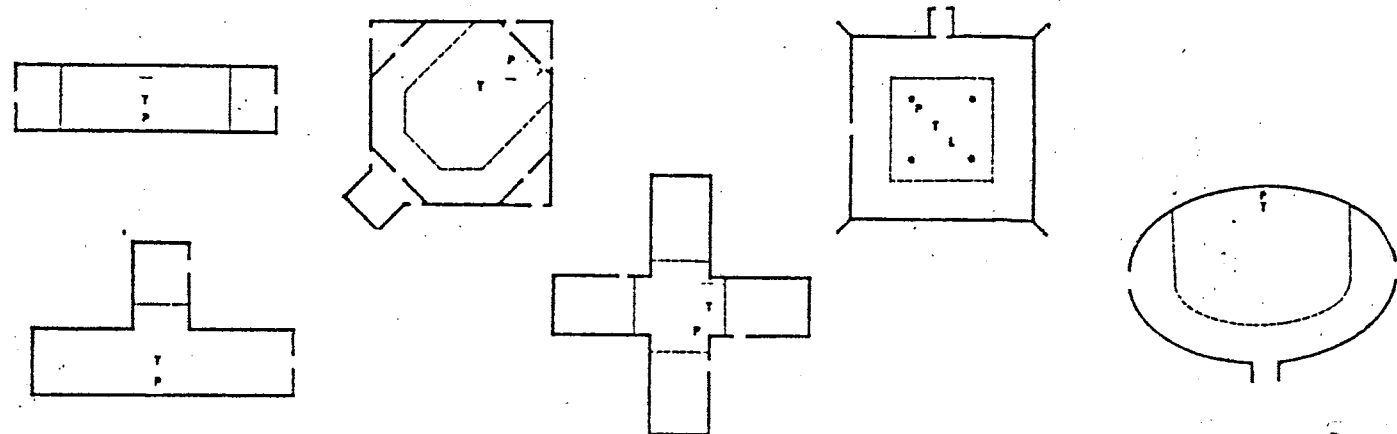
英国の宗教改革の指導者たちは、カルヴィンの神学に立脚し、礼拝堂の改革にも熱心であったが、全般的には中世からの伝統をかなり重んじた。中世の礼拝堂を破壊するような事態はほとんど見られず、それらをそのまま受け継いでいった。イングランドに新しいかたちの礼拝堂が現われ始めたのは、17世紀の後半からである。1666年、ロンドンの大火によって失われた教会は84あった。この復興にあたって、クリストファー・レン卿はセント・パウロ大聖

堂をはじめとして50余の礼拝堂を建築し、その真新しい建築様式は、その後2世紀間の英国国教会の礼拝堂の様式を支配したのである。レン卿の礼拝堂設計の根本原理は、全会衆が説教者を明らかに見、その言葉を確実に聞くことができるようにということであった。中世の縦長の礼拝堂とは違って、「会衆」に適当な場を与えることに重点が置かれた。それで彼の計算によれば、二階席のある礼拝堂でも2000人以上の会衆を収容するものは適当でないとされた。礼拝堂の形式としてはローマのバシリカ方式が基礎となって、多角形、長方形、てい形等変化はあるが、2分されない1つの広間である。中央正面に祭壇、または聖餐卓があり、その左右、会衆席に寄ったところに説教台と祈禱台Reading Deskとがある。会衆席は身廊内と二階席とに設けられるが、会衆は説教を聞き、祭壇を見、また聖餐にあずかるために祭壇に近づくに便利であるように位置付けられる。このように会衆席にもっとも大きな考慮が払われたことが、段階のある高い塔と共にレン卿の教会設計の特徴であった。レン卿の礼拝堂の内部はそのまま、玄関にギリシア式のポーチコを取り付け、レン

式の塔のある礼拝堂がロンドンの市に多く現われた。これはレン卿の後継者ゼームス・ギブスの創案になるもので、その代表的なものが、トラファルガー・スクエアのセント・マーティンズ・イン・ザ・フィールド教会である。これがアメリカの植民地に移入され、18世紀のアメリカの礼拝堂建築のモデルになった。宗教改革後、英国国教会内に改革を徹底的に行なおうとする運動が起こった。すなわちピューリタニズムであって、その勢いはしだいに強くなり、1663年のウエストミンスター会議が開かれるに至ったのである。その後教会内の保守派が勢力をばん回し、とくにカンタベリーのラウド大僧正は徹底的にピューリタンを迫害排除した。このような状態の中から非国教派と呼ばれる組合派、長老派、バプテスト派、クエーカー派などが現われ、この非国教派の出現が礼拝堂建築に新しい局面を開いたのである。各教派はそれぞれ異なった神学的立場を持っているが、その基調にはピューリタニズムが多少にかかわらず存在している。カーライルが言ったように、ピューリタニズムは外観や形式ではなく、事物の本質を追求した運動であるが、必ずしも形式を

無視したのではなく、むしろ誤った形式を排除したのであった。そして清新、荘重、威厳を表現するかたちが好んで用いられ、建築者の仕事のまじめさ、手堅さが好まれた。ピューリタンの礼拝堂の特色は、それが説教台中心に構成されるところにある。説教台の上にはサウンディング・ボードがあり、その頂上に若枝をくわえた鳩が見られる。これがピューリタンの唯一の装飾である。その礼拝がいかに説教中心に構成されているかがうかがえる。また二階席があることはピューリタンの礼拝堂の特徴である。言うまでもなく多くの会衆が、説教を明確に聞きうるように設けられたものである。この礼拝堂はむしろ集会所 Meeting House と呼ばれた。それは単なる人間の集まる場所ではなく、神と民との会見の場、契約の場であるとの意味である。あらゆる礼拝堂の中でもっとも単純なもの

はクエーカーの集会所である。そこには説教台も聖餐卓もない。中央正面に指導者のすわる1つか2つの腰掛けがあり、その前と両側に三方からこれを囲んで会衆席がある。集会所の入口が2つあって、内部も2つに仕切られるようになっている。これは男女席を分離するためであった。クエーカーには聖職者もなく、聖礼典もない。全会衆が共同に礼拝に参加する。この伝統は、男女別の席がなくなった今日も変わっていない。また一般にピューリタン系の外観は、世俗の建築物と異ならない。ここでは高い尖塔があり、狭くて高く、上にとがった窓のあるゴシック建築とはまったく趣を異にするものが見られる。レン卿によって教会建築の様式に一転機がもたらされたが、さらにピューリタンの様式は一段と伝統的なものから離れていったのである。



アメリカ

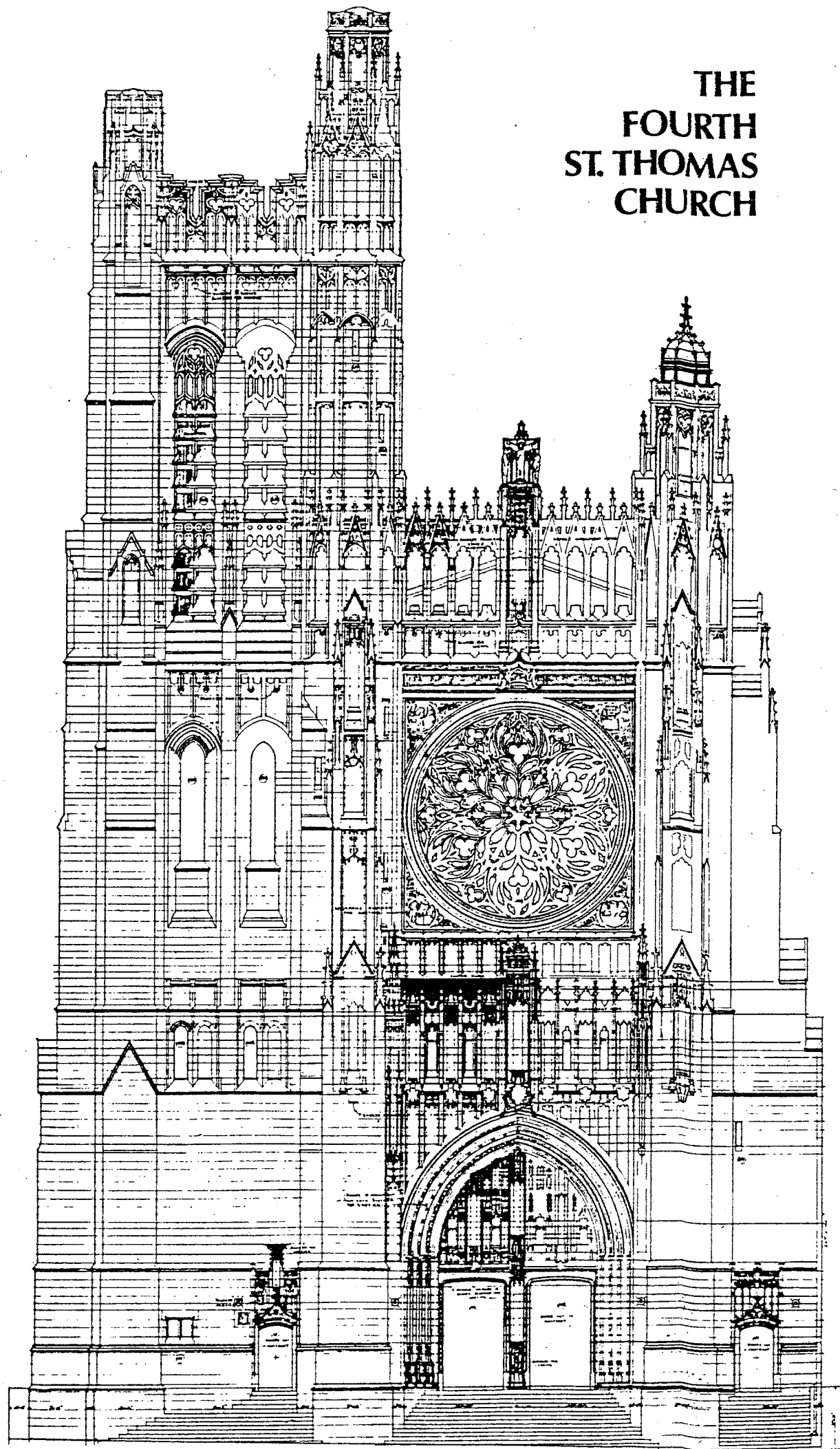
アメリカ大陸開拓初期は故国への思慕もあって、英国の古い形式そのままの礼拝堂が建てられたようであるが、18世紀にはいとレン卿の影響もあって、その保守的な色彩が一掃された。やはりこの時代の礼拝の中心は説教にあって、礼拝堂内の説教台および祈禱台はもっともめだった存在であった。

17・18世紀のアメリカにおける英国国教会系の礼拝堂は変化に富んだものであった。しかし19世紀になり、特にケンブリッジ運動の影響により、礼拝堂の統一が行なわれ、しだいにその姿を失っていったことは惜しまれる。さらにピューリタン系の諸教会の礼拝堂は、英国ピューリタンの伝統を引き継ぎ、シンプルであって、多様性が見られない。高い説教台の前に長老席があって、その前に小さな聖餐卓が置かれている。聖餐卓の上には洗礼容器が置かれる場合もある。これがピューリタンの礼拝堂のすべてであって、単純、清明、厳肅なその礼拝の精

神を表現したものである。礼拝のもっとも重要な部分は説教である。そのため説教台の位置は高く上げられ、もっとも高いもので4メートルくらいある。この時代の教会が礼拝を正しく行なうために、いかに旺盛な意欲を燃やして礼拝堂の建築に創意を凝らして改善を試みたかを見ることができる。これらの試みでもっとも著しい特色は、集中主義が求められたことである。内陣はほとんど考慮に入れられず、一つの広間に、聖職者と信徒とが一つになって礼拝に参加することに強調点が置かれている。そこは神の民が一つになって聞き、見、行動する礼拝の場である。この時代に南部ヨーロッパで建築されたローマ・カトリック教会の礼拝堂も集中式だった。ミサはバールのかなたで行なわれる神秘的なものではなく、その荘厳さは全会衆によく見られるものであることが求められた。

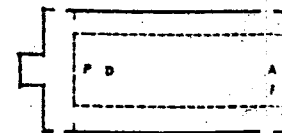
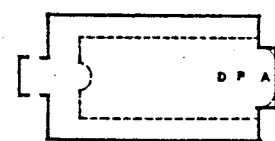
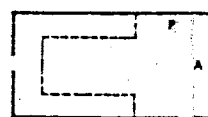
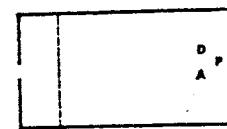
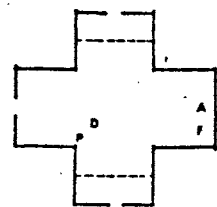
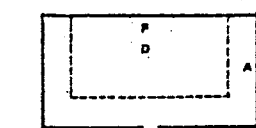
中世の礼拝堂の中にすでに礼拝が共同的性格から離れ、個人的なものとなっていく傾向が現われていることはすでに見たとおりである。宗教改革者たちは、礼拝の共同性を回復するためのあらゆる努力をしたのであった。それにもかかわらず、社会一般の個人主義的潮流は深く教

THE
FOURTH
ST. THOMAS
CHURCH



会の礼拝の中にも浸透してきたのである。その結果、19世紀以降プロテスタント教会の礼拝は共同的性格を失い、個人主義的なものが重んじられるに至った。宗教における個人的要素は根本的に重要であることは言うまでもない。ただそのことにとどまる時に、教会の存在が失われがちである。エキュメニカル運動の根本は、教会の共同性、公同性の回復である。礼拝改革運動も、エキュメニカル運動と平行して、同じ目標を目ざしているものである。礼拝における個人主義的要素の行きすぎを是正しつつ、礼拝の共同性を回復することがその主要目的である。礼拝堂建築の面から見れば、個人主義的傾向の結果が、具体的にはアメリカにおける講壇式または演壇式 Concert Stage Arrangement 礼拝堂と、英国におけるロマンティシズムによるゴシック建築の再興の2つに現われた。講壇式礼拝堂の紀原は、アメリカのリバイバル運動にある。この運動はアメリカの今日の教会の基礎となったものである。植民地の教会は少数者的存在であって、植民社会に向かって熱心な伝道、救霊運動がくり広げられた。伝道者はチームを組織し、大テントを張って数日間連続して集会を開

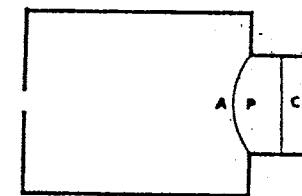
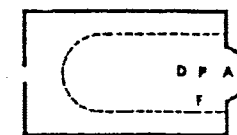
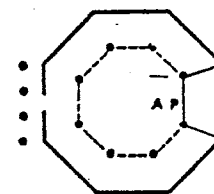
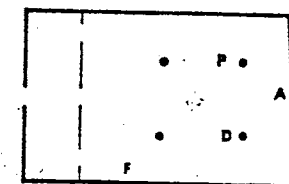
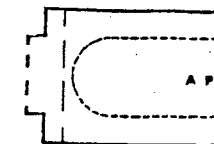
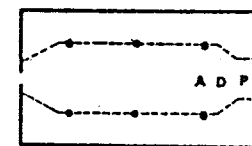
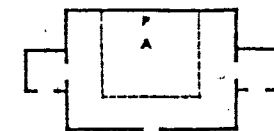
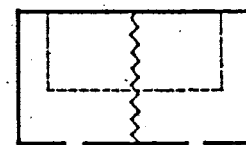
き、それが終われば他の町に移動した。毎日の集会では、悔い改めてキリストを受け入れるような熱烈な伝道説教、祈禱会などが行なわれる。自然に感情的要素が濃厚となり、主観的性格の強い集会であった。同時に、そこで強張された個人的、主観的要素が礼拝の中にも強く反映されてゆき、それは礼拝堂建築にも現われてきた。説教台は小さな簡単な机のようなものに置き換えられ、広いステージの上に置かれる。多くの大伝道者はむしろ、説教のノートを置くに足りるだけの小さな説教台を好み、説教中自由にステージの上を動きまわって聴衆にアピールする



ような説教をするのである。説教者に重きが置かれる。

礼拝堂司会者や賛美歌指導者などもステージに上がる。そのためステージの上には大きな椅子が3つ置かれている。説教台の前、ステージの下に小さなテーブルが備えられる。オルガンと聖歌隊のための位置が新しく考案される。ステージのうしろの下部にオルガンケースがあり、その上に聖歌隊席が半円形に会衆に向かってとられ、その上にオルガンのパイプが高くそびえるというのが流行した。このような傾向は礼拝

の性格を大きく変化させることになった。礼拝において主役を演じるものは、ステージの上上がった者だけである。会衆はゆったりと着席し、聴衆となり、また観客ともなり、積極的に礼拝に参加するという意識が希薄になっていくのである。そして「説教をききに」「美しい音楽をききに」「聖らかな雰囲気ひたるために」礼拝に出席すると言われても、それに不審を抱かぬようになった。礼拝がそのように理解され、その本来あるべき共同性と客観性とは見失われていったのである。



Ⅱ章 日本風土と教会

い

日本化

—外来思想の受容—

加藤周一氏によれば、わが国における外来の世界観の受容には3つの型がある。第1に、外来の世界観がそのまま受け入れられる場合。第2に、土着の世界観を足場としての拒絶反応。第3に、多くの場合におこった外来思想の「日本化」。ここにいう日本化とはどういうことか。「外来の思想が高度に体系的な観念形態であった場合には（儒、仏、キリスト教、マルクス主義）、その「日本化」の方向は常に一定していた。抽象的、理論的な面の切り捨て、包括的な体系の解体とその実際的・特殊の領域への還元、超越的な原理の排除、したがって彼岸的な体系

の此岸的な再解釈、体系の排他性の緩和。」

加藤周一 「日本文学史叙説」

風化

—対決なき精神風土—

明治以来、多くのキリスト教信徒が容易にその信仰を捨て去った事実、棄教現象の根本にあるのは、その重層的な日本人の精神構造があるためではないか。持っているものを自己批判し、清算して信仰にはいるというのではない。古きものをそのまま温存し、キリスト教的習慣、慣用語、思考法をその上にかぶせる。歳月が表層を風化すると容易に古きものが露呈する。それを意識する場合があります、しない場合がある。意

識した場合といえども苦悶のないのが特徴である。ただ古きものに帰ったのである。これはまた、マルキシズムに生じた転向問題とも通じることで、批判、対決の不徹底さにその原因があるのではないと思われる。それゆえに、今後この国の伝道を考える時、十分にこのことを考慮に入れる必要がある。なにか安易な手段、たとえば文学でもよく、ヒューマニズムでもよい、グループ活動でもよくサークル活動でもよい、なにか安易な媒介や手段によってキリスト教信仰を伝えたとしても、もし真実な深い悔い改めを通過せしめないならば、努力は水泡に帰するであろう。過去に対して、現在に対して徹底的な批判、対決が行なわれねばならない。「あなたはわたしの他に、なにものをも神としてはならない。」この第一戒が徹底的に理解され、打ちこまれる必要がある。

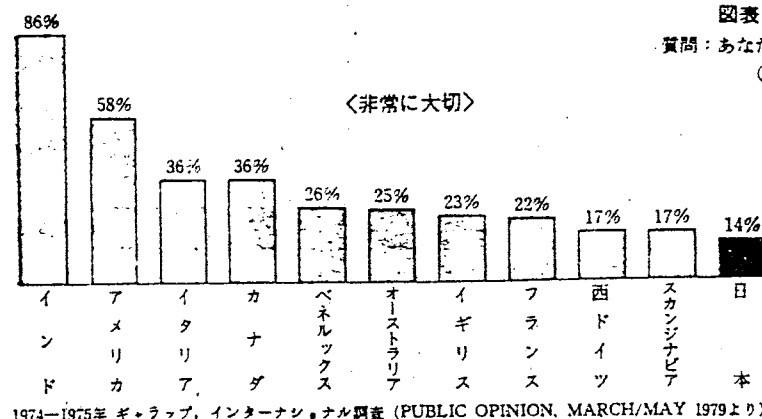
集団化

—個の自覚—

周知の通り、日本人の社会生活は「集団における個」という形をとり、集団への帰属がその人の生きざまを決定する。もっとも今日の機能的・社会的においては、各人は特殊化された機能集団—官庁、企業、生産工場等々—toに属し、各人に期待されている特殊機能のこなす手としての人間にかかるのみでなく、当該人間の全存在に及ぶ。ところで集団への帰属は個としての人間の自覚をうながすよりは、むしろはばむ方向にはたらく。何故なら、個の自覚は集団の「群衆」を招来するおそれがあるからである。かかる生き方をする人間にとって、個の自覚を迫るキリスト教は著しく排他的に見えるであろう。だからと言ってキリスト教が個の自覚をあきらめ、日常生活感情に訴えるべきだというのはない。むしろこのような状況にあるキリスト教は、少数者の群れであることに徹し、あくまでもその使信を宣べつづけなければならない。



図表 1 宗教的信仰の重要さ —11ヵ国比較—
質問：あなたにとって宗教的信仰はどの位大切ですか。
(非常に大切、やや大切、あまり大切でない、全く大切でない)



ろ

人間中心主義

—東洋教と近代主義—

東洋宗教というものがある。もっと厳密には東洋の宗教的諸哲学ないしは東洋の宗教的諸文化というべきものである。それはヒンズー教、仏教、儒教、神道などの狭義の宗教だけではなく、それらを母胎として生まれた諸々の文化をふくむ広義の意味における宗教である。日本についていえば、「日本教」と呼ばれている宗教のことにはかならない。したがって一言でいえば、「東洋教」といってよいであろう。この「東洋教」—— という名称は用いていないが—— との対話および対決こそがキリスト教の将来に重大な課題となることを予見していたのは、ヘンドリック・クレマーであった。このオランダの宗教学、伝道学者のいうように、世界史は今や東洋と西洋の出会いの時代に入っており、その出会のなかでもっとも深い問題は宗教的問題である。とくにキリスト教にとっては深刻な問題が待ちうけている。なぜならば「東洋の宗教的諸哲学は手ごわい人間中心主義 (a formidable anthropocentrism) —— これまで西洋に出現し

たものよりもさらに手ごわい—— をうちに隠している」からである。つまり東洋教なるものはかつてのグノーシス主義や密儀宗教などとは比べものにならないほど強力な力をもっているものであって、キリスト教にとっては「前代未聞の挑戦」 (an unprecedented challenge) となっている。しかもこの東洋教は—— 日本教の場合と同じく—— 科学主義をふくむ近代主義や近代ヒューマニズムとは矛盾しない。いやむしろ、東洋教と近代イデオロギーとは本質的には同じであるといってさしつかえない。東洋教にはいわゆる、「宗教 (信仰) と科学の闘争」は原理的には存在しない。なぜならば、東洋教も近代科学主義とともに、神中心なら人間中心主義にかならないからである。いいかえれば現代キリスト教は、東西の洋をとわず世界のいたるところで東洋教と近代主義の同盟よりなる人間中心主義から挑戦されているわけである。逆にいうと、現代キリスト教はこれらの東洋教と近代主義に挑戦しなければならないわけである。

古屋安雄 「現代キリスト教と将来」

恥意識、罪意識

戦後ルース・ベネディクト女史の「菊と刀—— 日本文化の型」が翻訳紹介され、注目をひいたが、これは戦争中米軍当局がコロンビア大学の文化人類学の教授であったルース・ベネディクトに委嘱して、「米国は日本人をどう理解すべきか」を研究せしめた結果である。その中で女史は、文化を罪意識の文化と恥意識の文化とに分け、日本の文化の型を顕著な恥意識の文化と考え、日本人の精神構造の中核をなしているものとして恥意識を指摘している。罪とはいうまでもなく神の存在を前提として意識されることである。それに対して恥とは人間関係を前提と

して語られることばである。狭い村落的な人間関係の中で生まれ、死んでいく村人にとって伝統的な村落秩序こそ神聖であり、その秩序から逸脱することは死を意味した。であるからその意識の底が人間にしかつきあたらないならば神と出会う場所はない。恥意識が罪意識の代用をなし、罪意識はここに育たない。その世間は狭い世間、顔を知りあい、ことばをかわしあう範囲の小さい世間である。その世間の外に出ればもはやその道徳意識は働かない。いわゆる「旅の恥はかき捨て」である。見えざる神の目を感じることがないのである。すべてが人間世界のことなのである。

江口武憲 「福音と風土」



は

死者なき風土

—無常観—

ルターにとって死とはなんであったのか。よく知られているように、ルターをして宗教に目を開かしめたものは死の恐怖であった。彼は1505年に大学の文学部を終え、つづいて法学部に入学した。その年の7月、帰省よりの帰途、エルフルトに近いシュトッテンハムにさしかかったとき激しい雷雨に襲われ、地に打ち倒された。恐怖の中でルターは聖アン

ナに誓約した。「助けたまえ、聖アンナよ。私は修道士になります。」それはとっさの出来事であったが、ルターはその時の誓約を守ってその月の17日エルフルトにあるアウグスティヌス派の修道院にはいった。さらに修道院入りの背後に親しい友人の突然の死があったことも伝えられている。ルターがかくも激しく死を恐れたのはなぜであるか。それはルターが死の背後に神の怒り、神の審判を見ていたからである。彼死を恐れたのは、それが単に地上の生活の終わりであるからでなく、

死をこえてなお生きる生命があり、それこそ真の生命であることを聖書の教えによって知っていたからである。また死が恐怖の原因となっているのは、罪がそれを妨げ、不可能にすることを知っているからにほかならない。罪のゆえに死においてただ神の怒りを見、いっさいの壊滅を見るゆえに死は恐ろしいのである。ルターはまた次のように言う。「もしキリスト者でありながら死が神の怒りであることを知らなかったとしたら、容易に死に堪えられるだろう。けれどその名は私たちをして死を苦からしめる。これに反し、異教徒は安心して死する。彼らはその際、神の怒りを見ないで死を単に人間の終わりで自然的なものと考え、悪い時に出合ったものだと言のみである。」(卓上語録) 死を自然現象のごとく見る見方、死を見ることあたかも帰するがごとき見方が日本の精神風土には存在する。聖書はきびしく死と対決することを教えてくれる。死、それは罪によって生のなかにはいりこみ、生を支配し壊滅させてしまう力なのである。罪の支配するところ、そこは死の世界であり、死臭がたちこめている。その罪と対決し格闘し、勝ちぬくことが生の意味なのであ

る。

日本においては、死を真剣に見つめない伝統がそのまま教会のなかにうけつがれ、温存されてキリスト教的な用語に紛飾されながら生きつづけているのを見る。死がそこでごまかされているゆえに、生もそこでごまかされているのである。

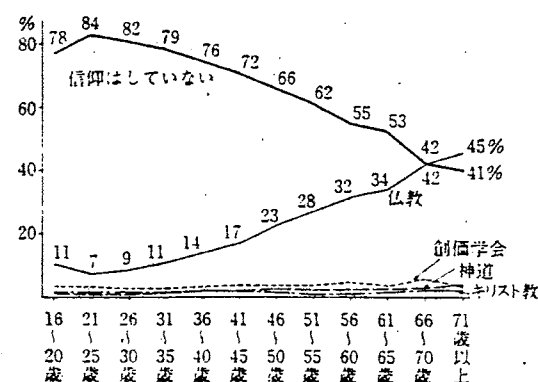
江口武憲 「福音と風土」

ふるさと

—村落的人間関係—

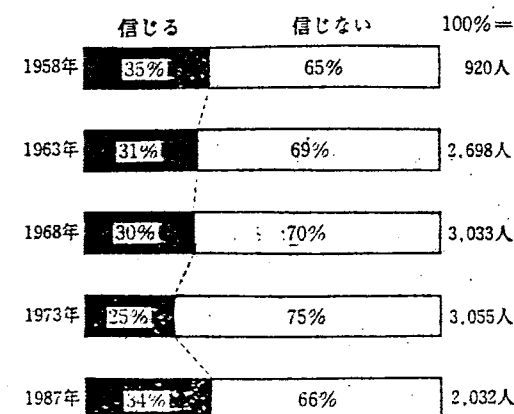
今日都会に出ていった人々がふるさとに帰るときには、宗教的な意味が含まれている。彼らは単に両親に会い友人にあいさつするために帰るのではなく、宗教的な祭りとか行事に参加することが主たる目的とされている。法事であるとか祖先の記念日の会合であるとか、村の神社の大祭というようなときにかこつけて都会に出ていった村人たちは帰省してくる。そしてやがて彼らも死ぬとき、ふるさとの墓地にまつられ、彼らの子どもたち、孫たちが彼らの命日や盆のときに帰ってきて祭りをするというしきたりがくりかえされてゆく。このような日本のふるさとに結びつく宗教意識を、堀 一郎 は宗教社会

信仰の有無・宗教 —年齢別—



1978年2月—5月「全国国民意識」調査、NHK放送世論調査所

信仰・信心の有無 —20年間の変化—
質問：あなたは、何か信仰とか信心とかを持っていますか。



「日本人の国民性」調査、文部省統計政策研究所

に

学の立場からつぎのように説明している。「それは単に自己に生まれ、祖先の住みついた土地という生物学的、社会的認識に基づく感情のみによってそうなのではない。実にそれは魂の親里とする意識が強くこの慣習を支持していると見られはしないだろうか。だからその親里に自己の肉体と魂を埋めることによって、さらに先祖と子孫との精神のきずなをたらしめようとの本能に近い感情が流れているのである。そして、そこに肉体上の祖先から両親へ、また生まれ落ちてから以後の社会にもった幾とおりもの仮親のなかにはぐくまれ、育てられてきた日本の村人たちが、やがては自らもそのオヤのひとりとなり、多くの子を生み、育て、保護してきた生涯を、こうしてふるさとの親元に帰り、オヤたちと一体のものとなるという心のやすらぎが、彼らの生活を根強く、安定したものとしてきたのではなからうか。だから親里は、いわば彼の他界であり、極楽でもありえた。そして安心立命の根拠でもあったわけである。日本人の靈魂観、他界観の中心にある祖先崇拜、氏神信仰は、かくて郷土性のなかに芽ばえ、そこにはぐくまれて、人々の魂のふるさととなり、ふるさ

とのシンボルとなってきたのではあるまいか」。このように、ふるさととは、単に土地という地理的・自然的空間をさすのではなく、そこには幾世代にもわたって形成された集団の共通の体験がこめられており、祖先崇拜につながる祭りがそのシンボルとして存し、宗教的な意識を共同の基盤として肉体的集団がそこに形成されている、ということが指摘される。

この私たちの前に立っている目に見えない巨大な壁のようなもの、沼のようなもの、それこそ日本の社会の、あるいは日本人の人間関係、精神構造を根本的に規定している「村落性、部落性」とでもいうべきものである。一般に村人は来訪者を歓迎するが、来住者を忌避する。外来者はその閉鎖的停滞的な村落社会に新しい知識をもたらすものとして好奇心をもって歓待されるが、その村に定住することは土地の負担を増すことになるので忌避される。村の組織の中にくり入れられるのは、たまたま土地に余裕が生じ、生産力を必要とする場合に限る。そして、その受けつがれた生存の姿勢が本能のように村人の心を支配している。キリスト教信仰が農村といわずこの国においてぶつかってきたのは、

この壁ではなかったか。これはキリスト教信仰のみのことではない。新しい信仰形態、新しい知識、新しい技能をもって村落に定着しようとしたものがくり返し経験してきたことである。異なった信仰、異なった知識を持った家系が村にとけこむためには数世代を必要とした。幾代にもわたって、そのような家系は畏敬と侮蔑のまざった目でながめなければならなかった。「つきもの持ち」とか、「すじ」とかいうことは古くはそれを表現した。それほどでなくても、村に何代か生活していながら、なお、とけこめない家系というものはあるものである。しかし、これは農村地帯に特に顕著に見られることではあるが、実は日本の社会構造全体に見られる現象であると言わねばならないのかもしれない。新しい思想・信仰に対して、日本の社会が従来示してきたのは、そうした村落的な受容と反発ではなかったかと思う。たとえばマルキシズムに対する態度においてそれを見る。畏敬の念と侮蔑の念の入りまじった気持ちで、民衆はこれに対してきたのではなかったか。「アカ」とか「主義者」ということはのもつ感覚は、昔の「すじ」とか「つきもの持ち」という庶民の感覚

に似ている。キリスト教徒に対する「ヤソ」という呼び名も、同様な語感をもつものであろう。自己と異なるものに対する秘められた嫌悪と反発、そしてひそかな虔仰、それは明治以後のキリスト教信仰に対して持たれてきたものではなかったかと思う。このような社会構造、精神構造を生みだしたものは何であらうか。それは狭い、限られた土地に土着してなされる稲作農業によって生み出された文化、稲作文化に基づくものではないだろうか。

このような狭い村落的人間関係の中で形成され、今もそれを持ち続けている日本人の精神構造の特徴は、さまざまな角度から、さまざまに表現されると思うが、差し当たり、それを根本的には「人間関係の重視」、そしてそこから派生する「他と異なることへの恐れ」「個性の未成熟」「批判精神の欠如」「思想の不徹底性」というようにとらえて良いのではないかと思う。



A

「第四の人間」の出現

—現代の人間像—

ここで大衆社会特有の人間像の問題に入らなければならない。この点は、いろいろな社会学者によってすでに論ぜられてきたところであるが、没个性的、画一的で自主性がなく、受動的で暗示や扇動にかかりやすいという特徴を持つ。それは伝統社会から開放されて、アトム化し、既存の伝統的価値体系が崩壊して、しかもそれに代わる新しい価値体系が欠如している状況と関連をもち、さらに一方的、画一的、大量的という特徴をもち、マス・コミュニケーションにさらされているという状況と対応する。社会学者はこうした大衆社会の人間像を様々なカテゴリーでとらえているが、日本において比較的一般化しているのは、リースマンの「孤独な群衆」における「外部志向型」という概念である。かれは、人間の社会的性格を伝統志向型、内部志向型、外部志向型に分けている。外部志向型の特徴を自己の同時代人、仲間、またマスメディアや世論に行動の規準をおく点に見いだす。したがって、この型の人間は他人の意見に

注意し、外部からの信号に神経を使うレーダー型の人間であり、しかもそのために、常に漠然とした不安の中におかれている人間である。リースマンによれば、これこそ大衆社会を代表する典型的な人間である。リースマンは、内部志向型の特徴として、所有と獲得に快感を感じ、仕事を自己に対立する客体とし、人生に長期的な目標をもち、娯楽を第二義的に考え、たえず超自我と自己とイドとの緊張に生き、人生への野心と外界の風波との間にバランスを保っている時、ジャイロスコープ的心理装置をもつというような諸点をあげている。これらはプロテスタンティズムが生みだした人間の典型的な諸特徴であり、プロテスタンティズムが18、19世紀にいかにも適合的な宗教であったかを示すものである。しかるに、20世紀の大衆社会における外部志向型の発生は、プロテスタント教会をして伝道の対象に対するアプローチの仕方について、あらためて反省をうながさずにはおけないものがある。

ホーケンダイクによれば、現在の西ヨーロッパの教会が機能を果たしているのは、第三の人間の文化的環境の一部分においてだけであり、

新しく成立しつつある第四の人間の文化的環境に対しては、その機能を果たしていない。この場合、第三の人間とは古典ギリシャ・ローマ文明とキリスト教文明の産物であり、ヨーロッパ精神とその人格文化において具現されているものである。それは教会が伝道の対象とし、活動の規準としてきた人間であり、多くの点で共通項をもち、たとい教会から離れていても通じ合うものを持っていた人間である。しかるにこの第三の人間は、時代おくれになっており、いま



や第四の人間が現われているのであって、教会は伝道の対象をこの人間に切り換えなければ、時代からとりのこされてしまうであろう、という。それなら、ホーケンダイクのいう第四の人間とはどういうものか。彼はそれを、反抗的妥協主義者として規定する。この場合の反抗という言葉は、日本語としては誤解されやすいが、カミュの「反抗的人間」との関連で理解するべきものである。すなわち、それは革命の反対語であり、革命への信仰と希望をもたず、むしろ革命に対しては無気力であり、「状況」に完全に妥協し、偶像が見破られたときもそれをすぐに廃棄しないで、しばらくそこに立たせ、何度も非難を楽しんでいるかのような人間である。ホーケンダイクによれば、このような人間の出現はそれ自体問題であるだけでなく、近代の終末という暗示的な意味をもっている。すなわち、第四の人間の生きる時代は「キリスト教以後」の時代であり、「ブルジュア以後」の時代であり、「個人以後」の時代であり、最後に「宗教以後」の時代である。さて以上のように、大衆社会における人間像について検討するとき、すでに暗示したように、とくにプロテスタンティ

B

ズムにとってこれが重大なチャレンジであることはいよいよ明らかになってくるだろう。現代の大衆社会的状況の特徴は、伝統的価値体系が崩壊し、既存のイデオロギーがその機能を果さなくなり、一種の思想的真空地帯が出現しているところにある。それだけに大衆は思想的にきわめて不安定な状態にあり、しかも暗示にかかりやすく、扇動にのりやすい。そこから絶対的権威を求める思想的狂熱主義が生まれるか、あるいは思想的な無関心が生まれてくる。プロテスタンティズムはこういう傾向とは正反対の立場にあるといってよい。プロテスタンティズムの特色は、絶対的権威への盲目的熱狂的な献身ではなくて、個人の決断を棄するところにある。もちろん権威を否定する相対主義でも、懐疑主義でもないが、その権威は可視的なものに求められず、むしろ不可視的なものに求められるものである。つまり、可視的な有限なものの絶対化にたえず抗議（プロテスト）し、それを浄化し、透明化するところにその特色がある。



世俗化現象

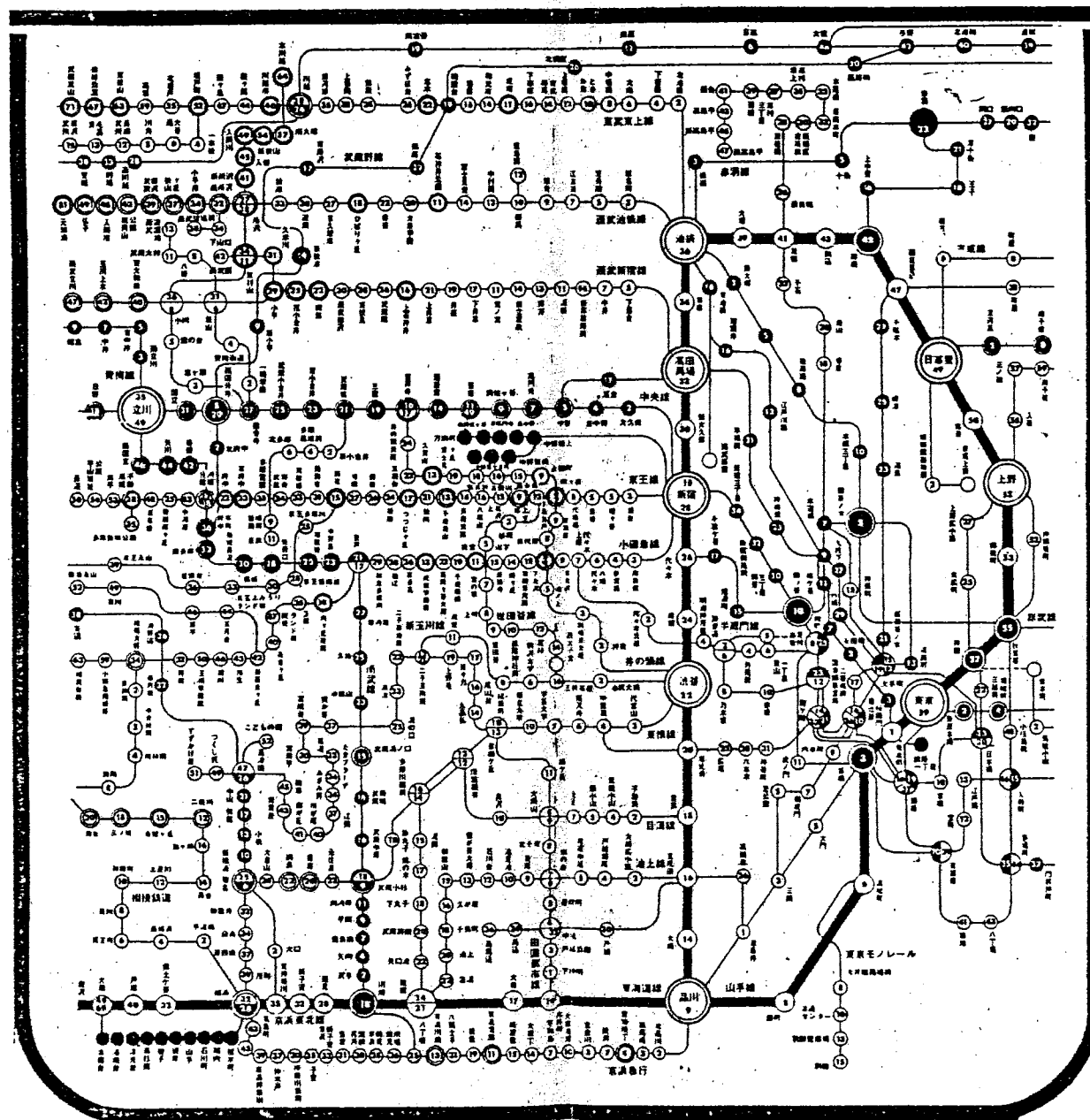
—生活圏の分離—

生活圏の分離という現象は、都市化現象の特色として、農村などの生活形態との比較において捕えられる。農村などにおいては、住居・職場・消費・娯楽が一つの地域社会の中で起こる。これに対して都市においては、住居・職場・消費の場・娯楽の場・文化活動の場が、それぞれ分離している。農村でも住居と農地が離れていることもありうるが、都市においては、住居と職場など、それぞれの生活圏の間に大衆社会が介在して、この両者の分離を徹底したものにする。家庭では夫である一人の人が、職場では係長であるとする。家庭でも職場でも彼は自分の身分があるが、家庭を出て職場へ通う間の空間、すなわち大衆社会の中では、彼はどこのだれであるかわからない無名の一大衆にすぎない。大衆社会において、無名の一大衆人となるということは、一方において身分の知られた社会で味わえない自由を享受することであるが、他方、多数の大衆とともにいても、なお孤独なのである。農村社会のように、どこへ行っても、どこのだれかが知っていることは、一方において事故があっても安全であることを意味し

C

ているが、他方いつもだれかに監視されているような不自由さがある。都市の大衆社会の中に埋没することは、このような不自由さからのがれることである。しかし同時にそれは底知れない不安と孤独への誘いでもある。各生活圏の間に、このような大衆社会が介在しているということ、しかもその大衆社会の提供する自由と不安とを味わえば味わうほど、生活圏の分離という現象は人間の生活全体を解体していく。禁断の木の実のようなものである。生活の解体ということは、生きがいの喪失であり、人間疎外であると同時に、世俗化現象につながっている。生きがいというものは、共同体の生活の中で生きることから生じてくる。したがって、生活圏が単一であり、その中で自分の占める位置や身分が明確であり、その地域共同体の中での生活が、他の人々との関係にささえられていることが身近かに感じられる場合、生きがいは比較的明確に出てくる。その生きがいは家庭生活・職業・娯楽その他すべての生活面を包括するものとして、統一した生きがいなのである。しかしながら、生活圏の分離が起こる場合に生きがいも分裂する。それは単なる分離や分裂ではなくて、破壊であり、喪失なのである。人間は全体として一人の人格であるから、生活のある部分においては生

首都圏沿線別、所要時間マップ



きがいを見いだすが、他の部分においては虚脱の状態で生きるということは長く続かない。虚無的な部分がしだいに他をむしばんでいくのである。かくして現代人は、自己の人格の崩壊を経験する。底知れない虚無への転落の危機に立たされるのである。仕事に生きがいを見いだすとか、家庭に生きがいを見いだすとか、部分的な生活に部分的な生きがいを見いだそうとする試みは、この解体作用に対するまじめな抵抗なのである。しかし、所詮この抵抗によって問題が解決されているわけではない。

生活圏の分離という側面から捕えた都市化現象のもつ、積極的意味を考えてみたい。生活圏が分離する以前の社会、すなわち、農村や前近代的社会においては、生活のすべての活動領域が、一つの地域社会という一定空間の中に限定される。そしてその空間の絶対化が行なわれる。そのような地域社会における宗教は、空間の絶対化と密接な関係をもっている。ある場合、それは既存の社会体制の絶対化であり、ある場合には支配階級の家系の絶対化であり、ある場合はその空間の中の自然の絶対化である。し

D

かしこのような空間の絶対化は、職場が住居から分離するという、きわめて単純な現象によって、崩壊を開始する。対等の立場で権威を主張する他の空間の出現は、あらゆる空間を相対化する第一歩なのである。かくして、一定の空間に結びついた権威は、それが地域社会の権威であろうと、本家といった家族制度上の権威であろうと、宗教的権威であろうと、すべて根底からゆさぶられることになる。ここに非宗教化、あるいは世俗化現象というものが起こってくるのである。さて、世俗化ということは、まずイスラエルにおいて始まる。聖書は人類の歴史の中で、神ならぬものが神格化され、神聖なベールをかぶって人間をとりこにしてきた宗教的なものの仮面を、次々にはがして、それらの本体を明らかにしてきた過程を記している。それらはある時は支配階級であり、ある時は人間にすぎない王であり、国家権力であるということが明らかにされた。それらのもっていた宗教的神聖さがはぎとられていったのである。世俗化である。この世俗化の過程の中で、何が明らかにされたかというならば、まことの神の姿と、神の前における人間の占める位置づけである。人

間はいかに貧しく、弱くあっても、自然や社会体制や権威の犠牲にされるべきものでなく、その尊厳が守られねばならないこと。そして、人間の運命は神秘化されたその力や、他の靈力によって左右されるものではなく、神から与えられる力によって、人間自身の問題として切り開かれるべきものであることが明らかにされていくのである。「成人した世界」という非常に意味深いことばを獄中において書き送ったのは、ボンヘッファーであったが、それまで世俗化という現象を否定的、消極的にしか受けとっていなかったキリスト教会に対する彼の貢献は大きい。社会が成人するとは、別のことばで言えば、神仏の加護なしに生き続ける社会と言えるだろう。水がなくなる時に、雨乞祭をすることをやめて、水道政策を人間の努力の問題として真剣に取り上げる生き方、これが成人した社会なのである。成人しつつある社会において、われわれはあらためて、驚きをもって聖書を読むのである。神が人となられた。しかも人間ははじめから神に場所を与えなかった。「空間には彼らのいる余地がなかったからである」と記されているように、神は人間の社会からは締め出され

て、馬小屋の中で、しかし人間として誕生された。また、その死は「お前はもう人間の社会では不要である」として処刑される罪人とともに、十字架の上での死であった。このように、イエス・キリストにおいて神は、堂々たるエルサレムの神殿においてではなく、離散した神の民の生活の中にいましたまい、まばゆいような宮殿ではなくて、馬小屋と十字架の上で神はわれらとともにいましたもう。したがって、村々や町々のまん中にそびえる神社や仏閣の中には、はじめから神はいましたまわないのである。それらが崩壊し、人間関係と不安と孤独の都市現象のただ中で、神はわれらと共にいますのである。このように現代社会のただ中で、神聖の仮面をかぶった宗教的なものを崩壊させつつ、人間を回復しようとして働いたもうキリストのみわざに参加し、これを証していくことが教会の存在の意味ではなからうか。ここに都市伝道の基本的な姿勢があると思う。社会から締め出されたところにおいて、その本領を発揮される聖書の神は、この世俗化のただ中において働かれる。そして非宗教化が進むにつれて、ますます福音のメッセージが明らかに宣べ伝えられねば

ならない。

状況の倫理

—キリスト者の生き方—

激変する現代におけるキリスト者には、個々の状況の中で「時の徴」を見きわめて応答するという態度が必要とされている。キリスト教倫理の領域では「状況の倫理」とか、「場の倫理」という表現がとられている。それは、キリスト教信仰の基盤や視点を放棄して状況に適合し、大勢に流され追従するというのではない。啓示によって示されている。キリスト教の人間理解、社会理解の視点から現代の具体的状況を分析検討し、そこにおいて彼がなすべき責任を果たすという生き方である。それは歴史的社会的状況の中で責任を果たすという点から、「責任倫理」と呼んでもよいと思う。



E

閉ざしつつ開くことの意味

ディートリッヒ・ボンヘッファは決定的に言う。純粋なこの世での生活は、十字架につけられたキリストの宣教を通してのみ可能である。真にこの世に生きることはその宣教と矛盾したり、平行的であるなら不可能ともなるし、現実的でない。それが可能となり、現実となるのは、キリスト宣教「において、とともに、のもとに」のみである。受肉し、十字架につけられ、甦りたもうた主、キリストの現臨においてのみ、この世について語ることができるし、この世の中に包含されることができる。キリストにおいてのみ、よってのみ、神の愛によって創造され、神の愛から離れ、神の愛によって贖われ、新しくされたあるがままの世界を知るキリスト者が真にこの世にかかわることは、世界の主である神に責任を負いながらこの世に生きることである。神がこの世からわれわれから引き離す方としてではなく、ご自身をこの世に与える方として、われわれに出会いたもうたのである。ここに2つの言葉が語られる。1つはこの世の否定で

あり、1つはこの世の肯定である。否定はキリストが十字架につけられることによって示されて、神とこの世との対決が明らかにされ、この世へのさばきが宣告される。肯定はこの世へのキリストの勝利によって告げられ、この世に対する新生が可能となり、この世に対する新しい希望が確かなものとされる。キリストにおいてキリスト者は、この世を否定もし肯定することも学ぶ。この世の自己充足性のためにそれを否定し、神の愛の対象としてこの世を肯定する。しかし、この逆説的否定と肯定との結合は、この世のものでないお方への、そしてこの世の創造主であり、贖い主である主への責任の関係の中からのみ可能である。この行為の中にあっては、われわれは単なる宣教の聞き手ではなく、たんなる神のわれわれに対する処理の仕方の傍観者でもない。キリスト自身の招きと命令によって、われわれはその参与者となる。「取って食べよ。これはわたしの体である。みなこの杯より飲みなさい」との戒に従うとき、自ら神への行為に引き入れられる。われわれの信じる共同体はイエスの死と復活にあずかる者となるのである。われわれは、全人類とともに神のさば

きのもとにあることを知っている。また、すべての人たちとともに神の愛の対象であることも知っている。



1

日本宣教

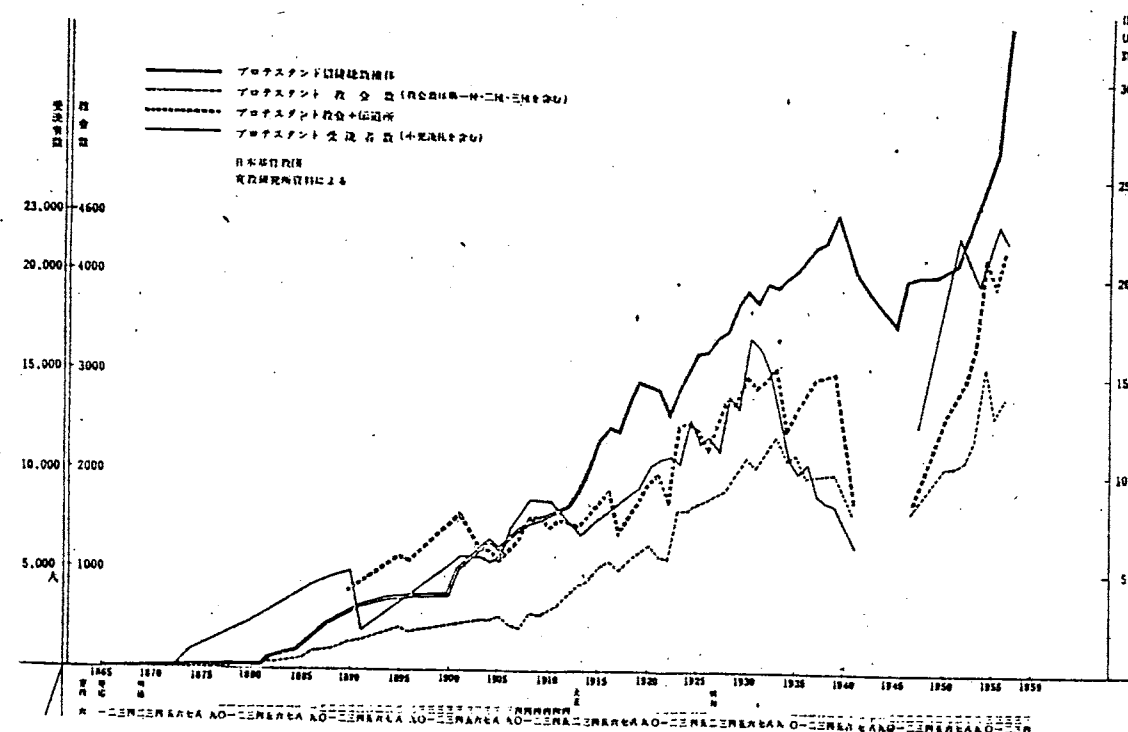
一地の果てまで一

キリスト教は今日にいたるまで、2000年に近い歴史を通じて、いろいろと変化してきた。それは先ず、ヘレニズムの世界に入り、その宗教、思想、文化との触れ合いを通じて、ヘレニズムの世界をキリスト教化した。同時に自己自身、その影響を受けて新しい面を展開することができた。この折衝を、クレメンスやオリゲネスの思想的営為において見ることができる。アレキサンドリアの神学は、その所産である。ローマ的世界に入ったキリスト教は、はじめ甚だしい迫害を受け、幾多の殉教者を出したが、四世紀はじめ、コンスタンティヌスの時に国教として認められて定着し、ローマ人の法意識の影響の下に教会の制度を確立し、教会法の制定等を行うこととなるが、アウグスティヌスによって神学体系が整えられ、西方ラテン教会の基礎がおかれ、時代はキリスト教的中世に入る。スコラ神学によって神学体系を完成すると共に、教会権力を確立し、典礼職制をととのえた教会は所謂キリスト教世界を形成し、著しく政治的

性格をもつにいたったが、修道院運動がこれを補完し、教会をして教養、文化、思想、教育、産業の推進者、保護者たらしめた。やがて、かの普遍論争（唯名論と実在論）を通じてカトリック教会の普遍性がゆるぎ出し、教会内に相つづいて改革運動が起るにいたるが、それが16世紀、マルティン・ルターにおいて、宗教改革として爆発した。それはキリスト教の根本に立ち帰ることであったが、同時にキリスト教のゲルマン化を徹底させることでもあった。プロテスタント教会の成立である。宗教改革は福音信仰の敬に根ざし、sola・fideの立場をとり、聖書に神の言をきいたが、しかし、伝統、職制、典礼、法規等に重きをおかなかったために、教会形成という点では弱かったように思われる。つづいて、新世界の発見により、キリスト教が全世界にひろまり、多様な形態をとって展開したが、東洋伝道、中国伝道を足場として、最後に日本にやってきた。日本のプロテスタント・キリスト教の布教は、安政6年（1859年）、その前年に締結された下田条約に基づいて、米国プロテスタント・エписコパル教会、米国リフォムト教会、米国長老教会が宣教師を派遣し

たことにはじまると言われている。爾来、今日まで120年、その間、教会や信徒の数に消長はあったが、ここ数年、カトリック信徒を加えても110万人前後にとどまっている状況である。

百年間におけるわが国プロテスタントの教勢



2

都市伝道

—開かれた教会—

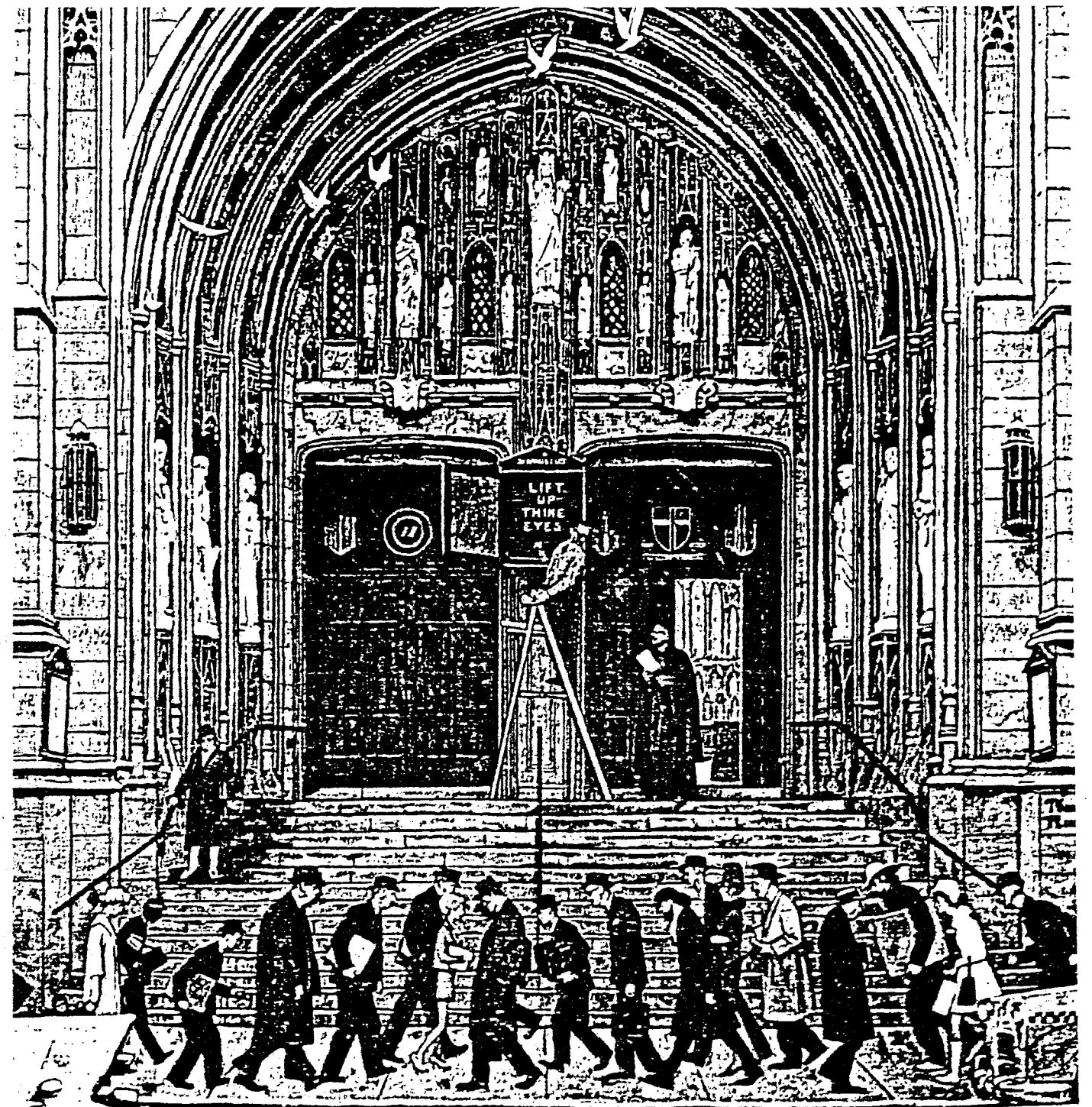
キリスト者は、つとめて相手の思想の世界に入りこみ、福音を届けたい人々と同じ立場に立つように努力しなければならない。現代都市はけっして単一な世界ではなく、きわめて多様な要素をふくんでいるだけに、伝道のためのアプローチもまた、多様性に豊んでいなければならない。また都市伝道は信徒の働きを重んじなければならない。そして小グループを活用することが大切であると言える。であるから、世界伝道に必要な諸方策の開発を見るために今求められているのは、想像力に富む開拓的な諸方法である。それによって、神のもとにあってキリストに根ざしつつ、自己をとりまく文化とも密接なかかわり合いを持った教会が起される必要がある。またイエスは信じている者だけの主ではなくて、世界の主でいたもうから、そのことを信じる教会は、ますますこの世界に向かって開かれたあり方をしなければならない。この世界が神のものであり、神に愛され、そのためにイエスが来たりたもう世界であることを理解する

時、教会はもっと世に向って開かれ、為すべきことも多く出てくるはずである。教会はわれわれの住んでいる社会と、もっと密接な関係を持つべきである。教会が今日、この世に対して新しい理解を持つならば、教会は多くのなさねばならないことに、また社会の種々の問題に関与する可能性と機会を持つようになるはずである。

それによって教会は、社会に直面すればするほど、もはや社会に向って何も言うことがなくなるのではなく、むしろ教会だけが持っているものをますます多く語ることができるのだと思う。教会は社会から学べば学ぶほど、そこにどんな問題があり、その解決には本当に深いところで福音が必要であるということを知るのだ。



「LIFT UP THINE EYES」 なんじらの目を上げよ



福音の土着化

—よき収穫を得るために—

近年福音の土着化ということが言われるようになった。福音の宣教の問題として、キリストの福音が、いかにも直輸入的なバタ臭さをもって受け取られることに対する反省であろう。キリスト教信仰と、これを日本に伝達する媒介となった人々の属する西欧の文化との区別を、意識的にしないままキリストの福音を受け取った傾向が、戦後においても存在していた。したがって、福音の宣教と西欧化とが混同されることがしばしばありえた。これに対して、福音が日本人として生活している人々の、日本人としての現実の中で、その生活に即して受けとられ

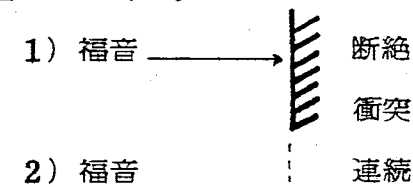
ることを、福音の土着化ということばで呼ぶのである。しかし、この場合問題は二つある。すなわち、福音そのものを非西欧化して、日本人の生活の現実の中に根を降ろしうるものとして宣べ伝えるということ。第二に、福音をどのように非西欧化しても、福音そのものの、日本人の生活や文化とは異質のものがあるということである。宣教の問題として考えると、このことは次のように言い換えることができる。第一は、日本という土壌にまくべき福音の種を十分に選別して、純粋なキリストの福音としてまくこと。すなわち種の問題である。第二は、日本社会・日本文化・日本人の精神構造といった土壌の問題である。種がいくら良くても、土が酸性であればよい収穫は望めない。



福音と文化との出会い

—教会成長論—

主イエス・キリストの福音が一つの文化に出会うとき、次のような二つの状況が結果として表面にでてくる。



福音をもたらす者たちは多くの場合、1) の方を強調して、a) まず、その文化を告発し、b) その習慣となっているものに反対し、ついには c) 自分たちが正しいと思っているものを選ぶようにしむけるというやり方をしている。しかし、2つの「連続性」を強調する方が良いと思われる。実際的な問題として考える場合、福音が一つの文化に突入するとき、変えなければならないもの、すなわち「断絶」よりも、「連続」すなわち、変らないで存続するものの方がはるかに多いわけである。その例を旧約聖書にってみるならば、神がアブラハムを最初にとりあつかい始められた時、「断絶」ということで起こったことはただ一つだけであった。それは、

アブラハムが自分の基本的忠誠を変えたことである。神御自身がアブラハムの中に入られてから後に他の種々の変化がもたらされるようになったわけである。神が語りかけ始められたとき、アブラハムはまさに異教徒であったのであり、異教文化の中にいたのである。しかし、神はその文化形態を受け入れられて、御自身の意味付けをされた。その文化形態とはとりもなおさず異教文化であり、異教言語であった——ヘブライ語は異教言語であった。にもかかわらず、神はそれを用いることをよしとされた。このことが実は、教会成長論の基盤になるものなのである。

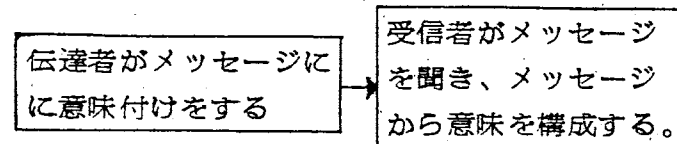
キリスト教は文化の形態ではなく、その文化のもつ意味に関心をもつものである。形態は外形的慣習であり、意味はもっと深い目的とか動機づけとかということになる。新訳聖書においても使徒パウロはギリシャの密儀教の用語を用いたりしている。「奥義」ということばを用いて「イエスは奥義」であると言っているのも一例である。これは日本人が仏教用語をとって、キリストに適用するというのと同じことになる。「信仰の創始者であり、完成者である」という

表現も同様にギリシャの密儀教からきている。要するに、これらの表現は文化の形態であって、使徒パウロはこれに新しい意味づけをしたわけである。使徒ヨハネもギリシャ哲学の用語「ことば」（ロゴス）をとって、イエスが「神のことば」であると言っている。これら一連のことばは文化脈化をしているということになる。すなわち、福音を受ける側の文化の中に存在しているものを用いるということである。ちなみに、バプテスマもギリシャの密儀教への入信のためのもので、その意味では異教形態であったし、ヘブル人にもギリシャ人にも用いられていた。しかし、この異教形態にキリスト者たちが新しい意味づけをしたのである。

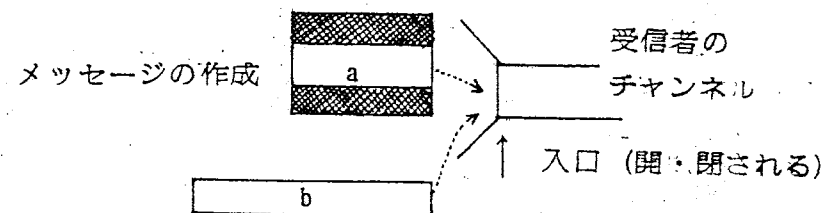
以上のようなわけであるから、われわれの用いる文化形態が聖書の使信に対して人々が心を閉ざさないように注意することをおこたってはならない。このつまづきがないならば使信は受け入れられることが考えられるからである。

福音の伝道にあたってコミュニケーション理論を理解することは大切なことである。まず、コミュニケーションには三つの要素が考えられる。

伝道者 —— メッセージ —— 受信者
(聞き手)



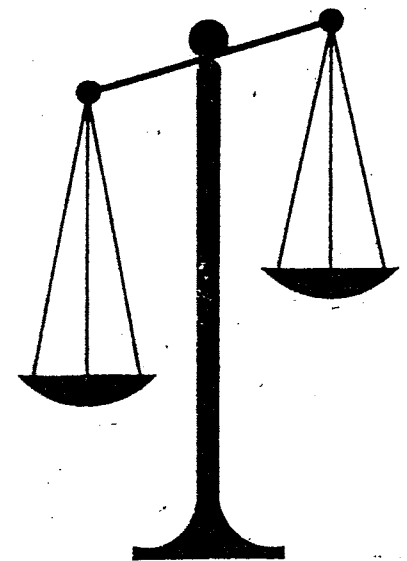
受信者がメッセージからその意味するところを構成するプロセスにおいてメッセージの意味が変わることもある。また、伝道者がしなければならないことは、そのメッセージを受信者のチャンネルに合うようにすることである。



受信者のチャンネルが細く、メッセージが a という四角いものであれば、b のように細長くして合うようにすればよいわけである。さて、チャンネルには入口があり開閉自在である。したがって、受信者が開いて、聞くような構成としないメッセージは受け入れられない。

上記のように、受信者がメッセージの意味を構成するプロセスに関係することが文化脈化ないしは、これまで使われてきた用語でいうならば土着化ということになる。もちろん、福音の文化脈化ということは大変な危険性をはらんでいる。そこには常に混合主義に落ちいる危険がよこたわっている。混合主義には二つの危険な形態がある。

- 1) 伝統的文化への過度の適応。
- 2) 新しい文化への過度の適応。

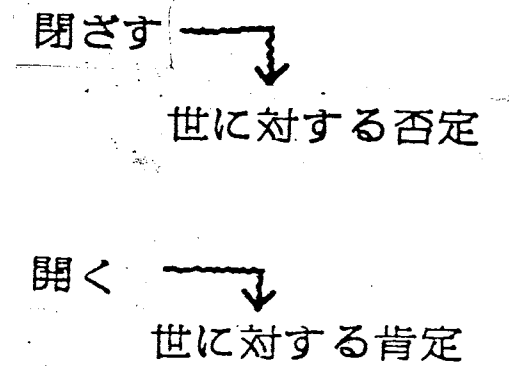


Ⅲ プロジェクト

CONCEPT

閉ざしつつ開く

教会が真にこの世にかかわるとは、世界の主である神に責任を負いながらこの世に生きることである。神がこの世からわれわれを引き離す方としてではなく、ご自身をこの世に与える方としてわれわれに出会いたもうたのである。ここに二つの言葉が語られる。一つはこの世の否定であり、一つはこの世の肯定である。否定はキリストが十字架につけられることによって示されて、神とこの世との対決が明らかにされ、この世へのさばきが宣告される。肯定はこの世へのキリストの勝利によって告げられ、この世に対する新生が可能となり、この世に対する新しい希望が確かなものとされる。キリストにおいて教会は、この世を否定もし、肯定することも学ぶ。この世の自己充足性のためにそれを否定し、神の愛の対象としてこの世を肯定する。しかし、この逆説的否定と肯定との結合は、この世のものでないお方への、そしてこの世の創造主であり、あがない主である主への責任の関係の中からのみ可能である。この行為の中にあっては、われわれは単なる宣教の聞き手ではなく、単なる神のわれわれに対する処理の仕方の傍観者でもない。キリスト自身の招きと命令によって、われわれはその参与者となる。われわれは全人類とともに神のさばきのもとにあることを知っている。また、すべての人たちとともに神の愛の対象であることも知っている。



1章・2章のまとめ

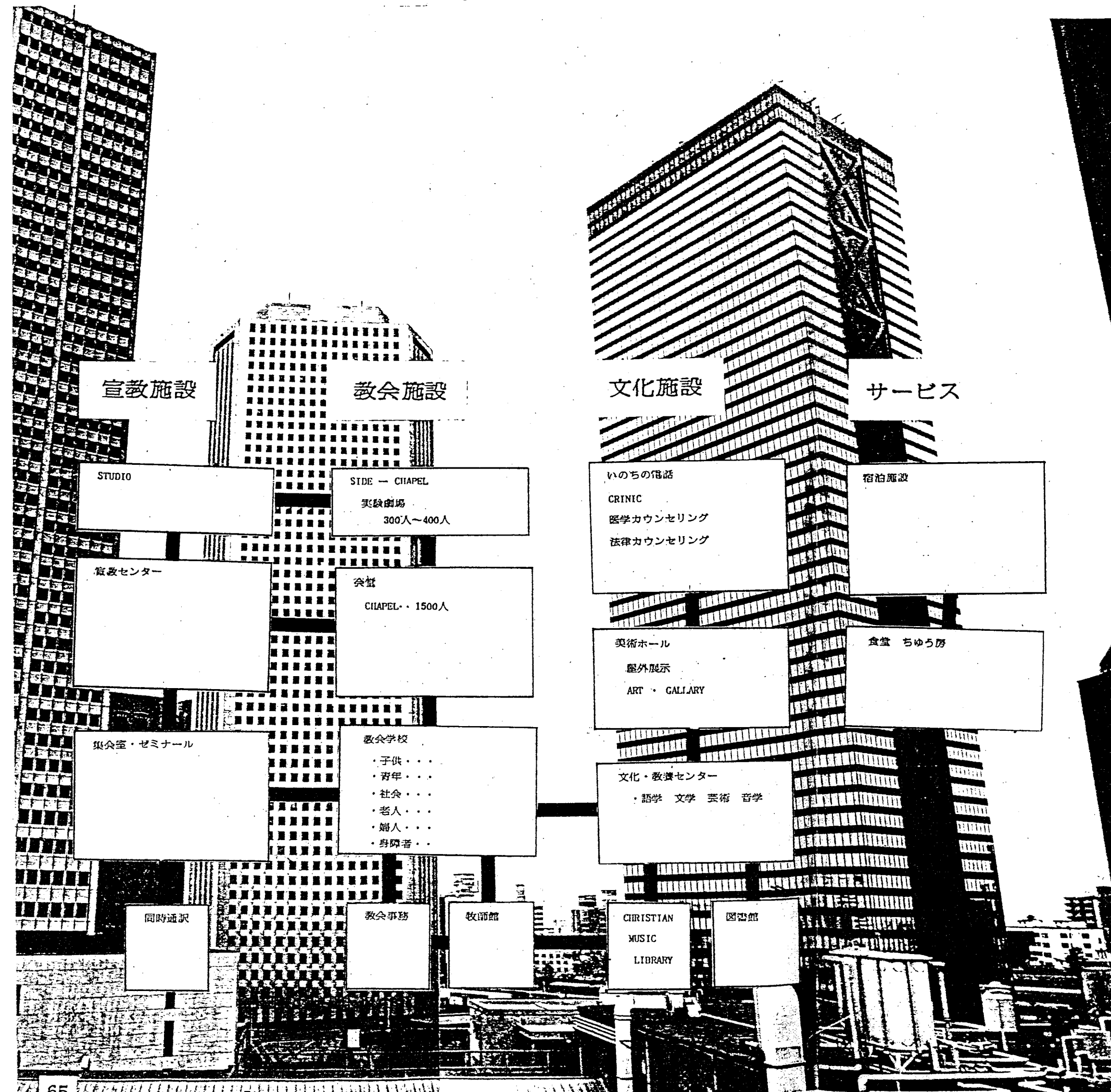
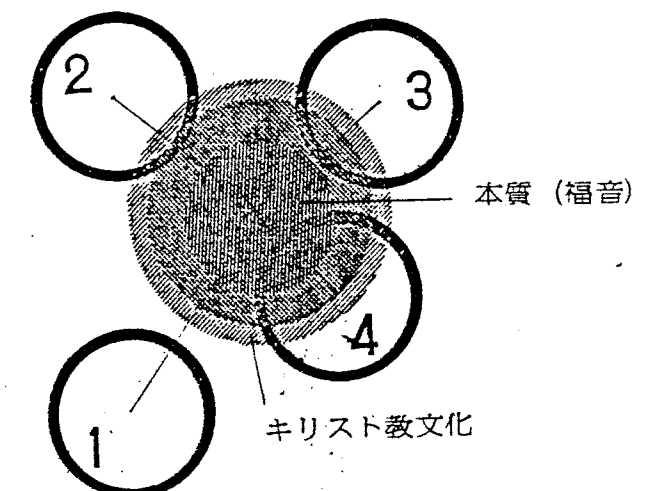
イエス・キリストの十字架の死、そして復活以後、福音は小さなイスラエルから全世界へ広がっていった。この福音の波はそれぞれの時代、またそれぞれの場所を経て進展していった。その間、キリスト教の福音はそれぞれの文化に多くの影響を与え、変化させてきた。また同時に、キリスト教の形態においてはそれがその時代とともに生きるの、「朱に交われれば赤くなる」のたとえのように、キリスト教もその時代の影響を受けてきた。そのために各時代のキリスト教は、中世には封建的特徴をそなえ、近世には個人主義的色彩を帯びた。現代では他者と共存する主体性が強く意識され、強調されているようである。しかし、そのキリスト教の本質（福音）においては変化しておらず、聖書がそれをさしめしていると言えよう。さてキリスト教の形態、つまり礼拝の場においてその変化を見た時、それぞれの時代、またそれぞれの場の影響を受けている。初代においてはユダヤ教の礼拝の場がキリスト教の礼拝の場であったり、かつまた家が礼拝の場であったり、また迫害時にはカタコンベのように地下墓室が礼拝の場になったこともあった。そして313年、キリスト教が国教として認められるにあたり、もとあったバシリカが教会として転用されてきた。そして、キリスト教が中世の地域に根ざすにあたって、その地域ごとにカテドラルが次々に建て

られ始めていったのである。このように、本質においては変化していないが、その形態においてはその時代、その場所ごとの社会的状況、技術的・工学的状況によって大きな違いを見せている。逆の見方をするならば、その変化はこの時代、また場の社会的・文化的ニーズに答えたがために表わされた変化であったかもしれない。そして近年、そのキリスト教の波は日本にも押し寄せてきて、そして今100年がたった。なお、キリスト教が日本の文化に、また日本の精神風土に土着し、進展していくために多くの知恵が必要である。そして今、現代、人々が心から求めているニーズに答えていかななくてはならない。

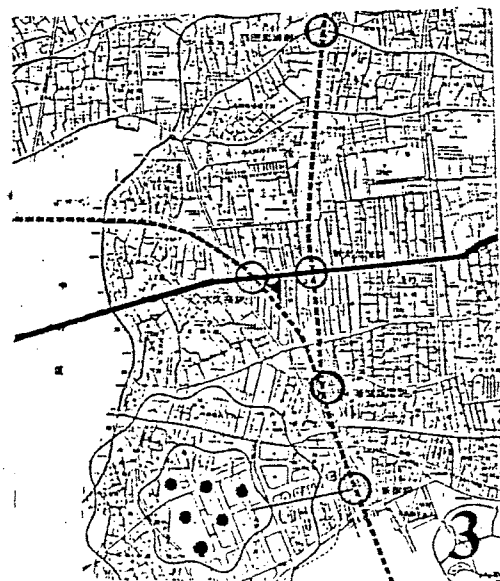
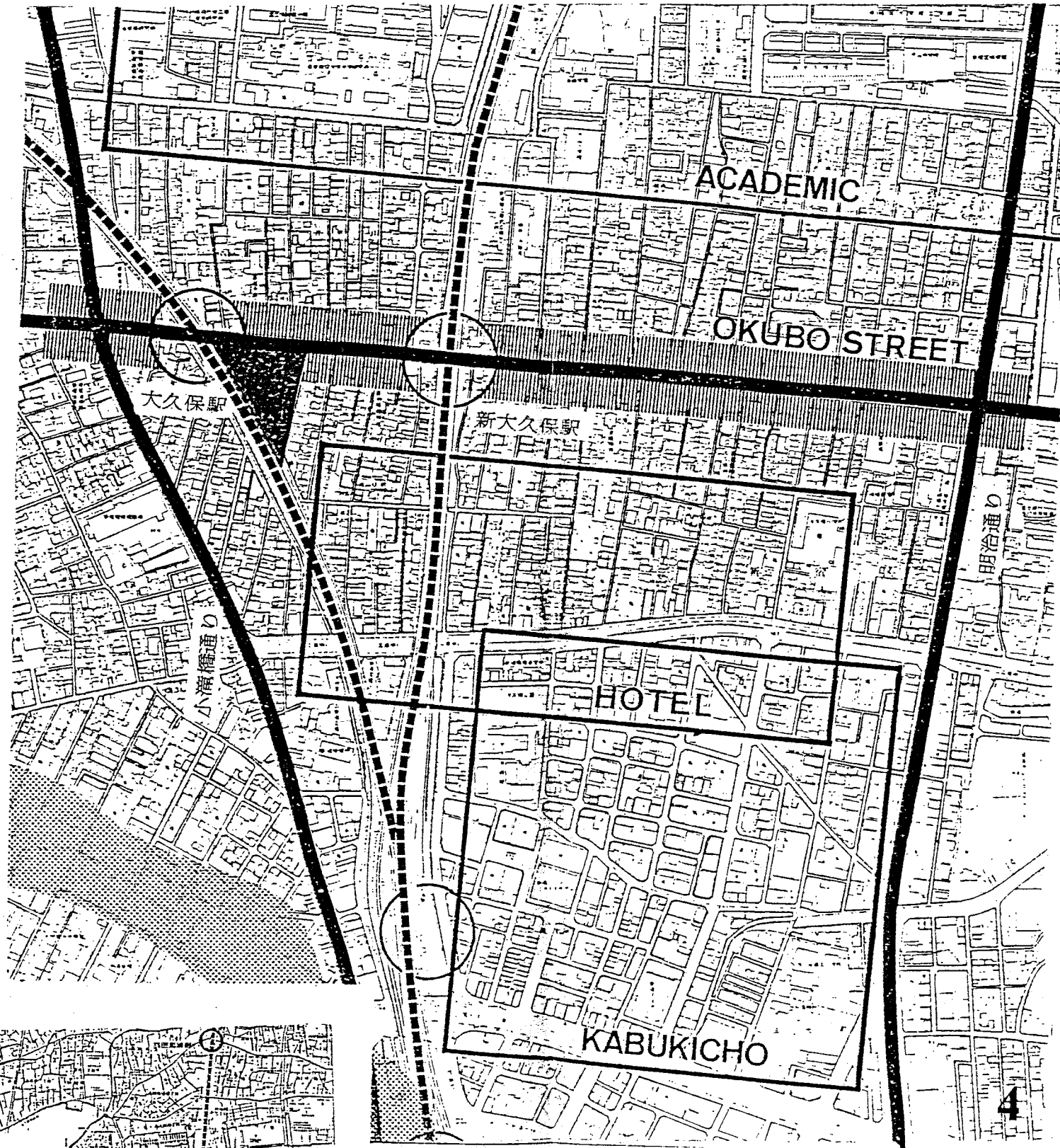
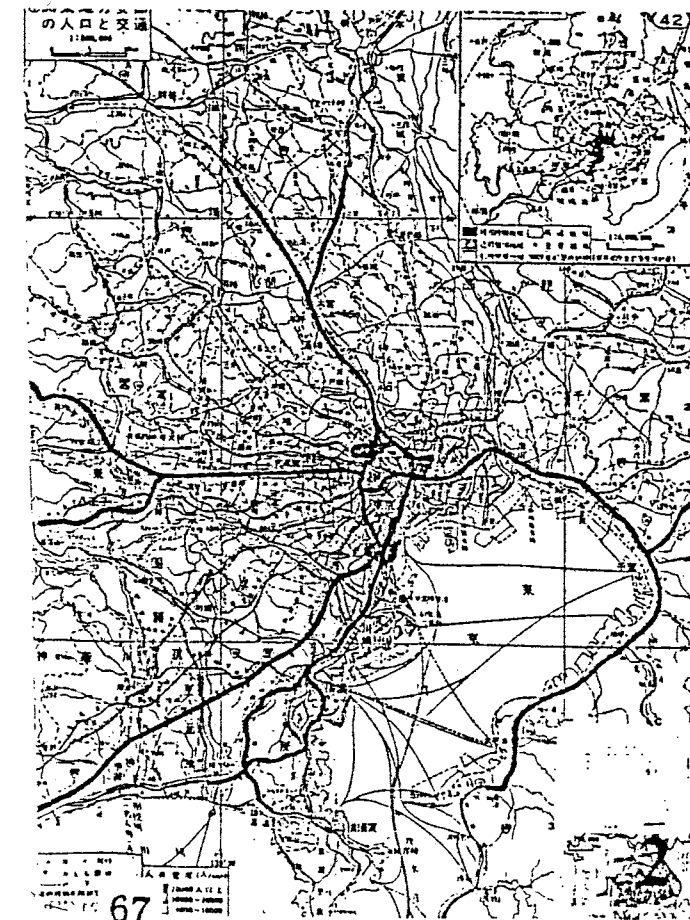
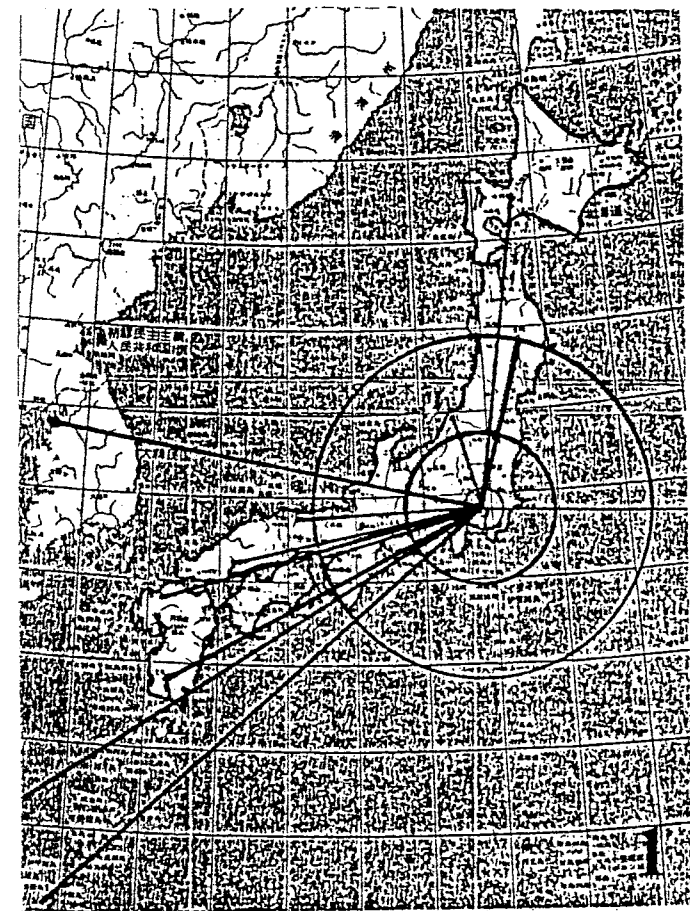


PROGRAM

現代都市は決して単一な世界ではなく、きわめて多様な要素をふくんでいるだけに、伝道のためのアプローチもまた多様性に富んでいなければならない。であるから、世界伝道に必要な諸方策の開発を見るために、今求められているのは、想像力に富む開拓的な諸方法である。それによって自己をとりまく文化とも密接なかかわり合いを持った教会が起される必要があり、また教会はますますこの世界に向かって開かれたあり方をしなければならない。それによって教会は、社会に直面すればするほどはむしろ教会だけが持っているものをますます多く語ることができるのだと思う。教会は社会から学べば学ぶほど、そこにどんな問題があり、その解決には本当に深いところで福音が必要であるということを知るのである。



敷地周辺



政治、経済、文化のあらゆる活動において、日本の至る所から人々の足は東京に向けられている。同時に、人々はここから何かを吸収して散らばっていく。そればかりか、東京は、今や国際的交流の場（拠点）としての機能を有している。いわば東京は国内的・国際的宣教、長期的・拡大的宣教の本拠地としての役割を担っている。

1

さらに首都圏とよばれる東京近郊に的を絞って見れば、通勤、通学に代表されるように、その日常生活利用度ははなばなしい。人々はあらゆる面で、生活の知恵たるものをこの東京に求めている。そして、多かれ少なかれ、それを享受しているのである。

2

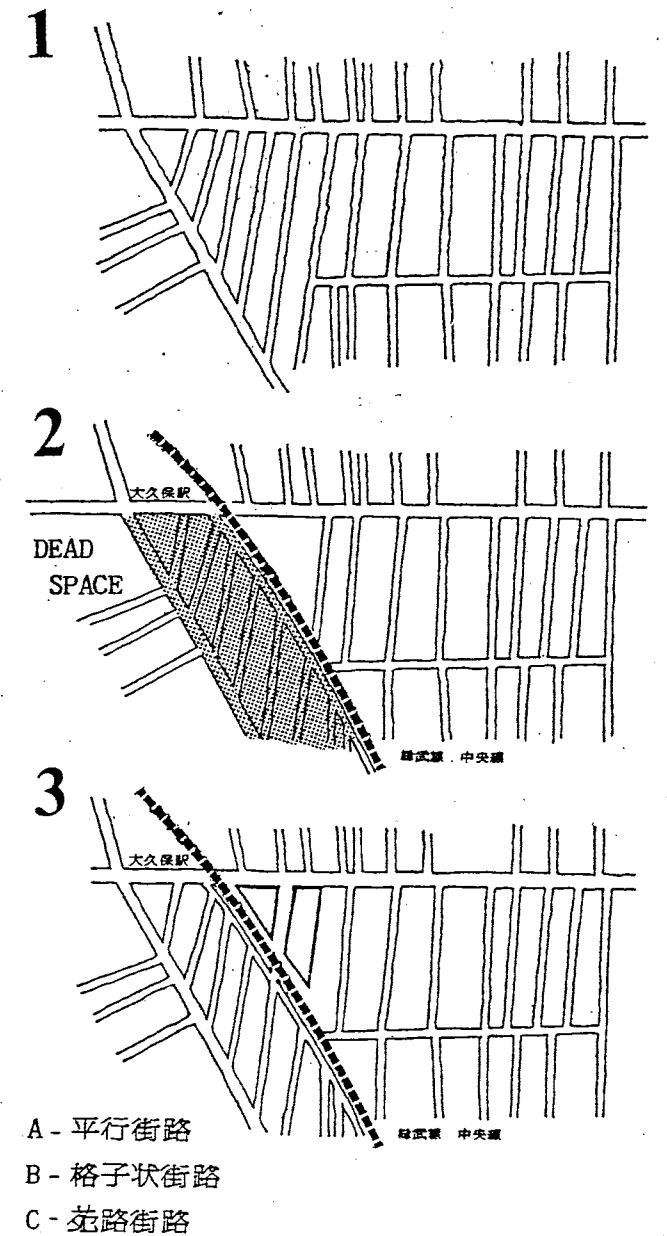
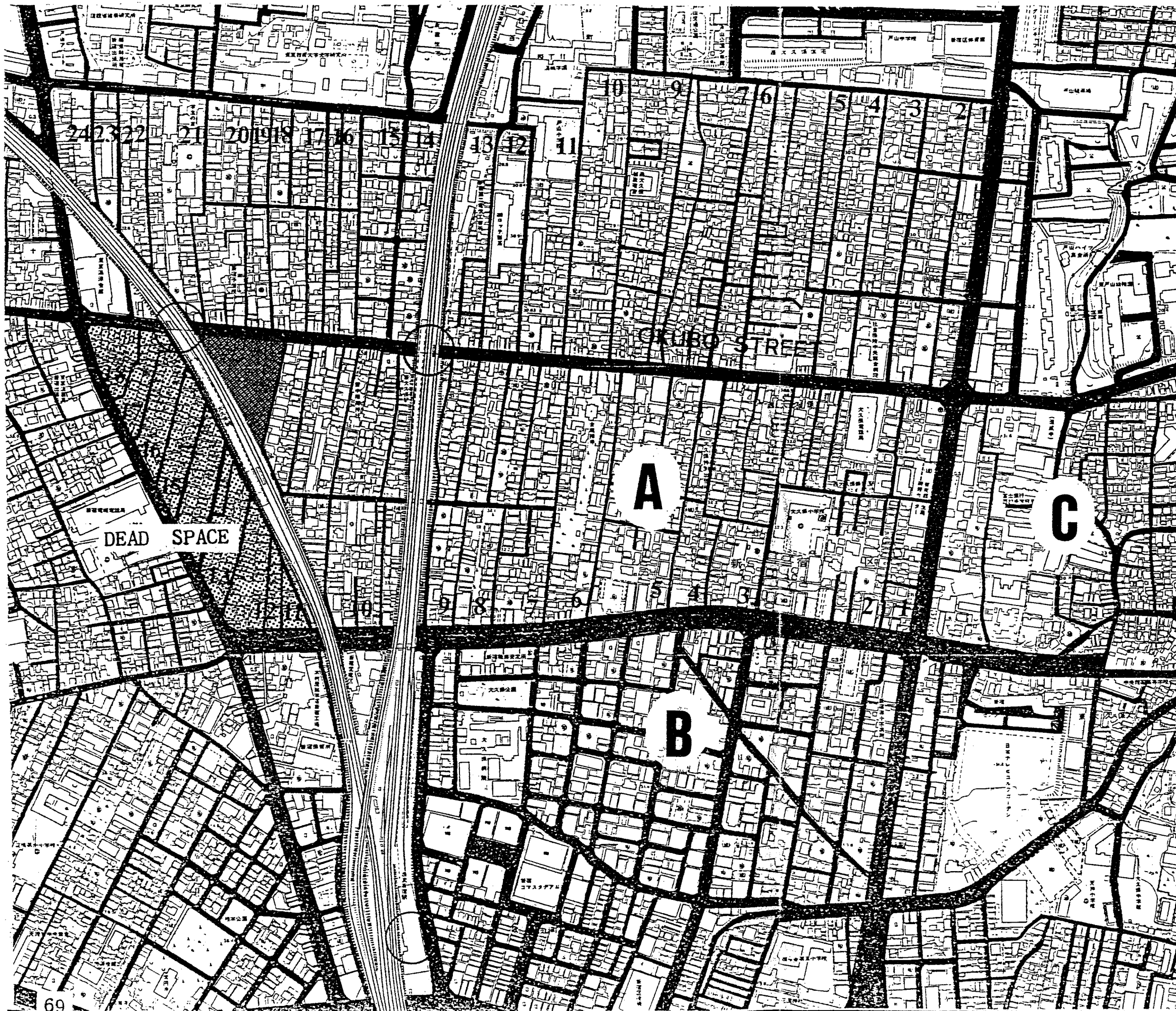
さらに地域周辺に限ってみるならば、質的にも量的にも、はるかにその機会に恵まれている。と同時に、急速に成長している副都心の影響が広がりつつある。要するに、日常的・非日常的の生活の営みの浄化作用、オアシスとしての使命が教会に与えられている。

3

計画地は北新宿地区の一画にあり、国電の中央線、大久保駅に接し、新大久保駅から約200メートルの至近距離にあり、敷地の北側で大久保通りと接している。周辺地区は2本の国電、小滝橋通りなどを通じて、新宿と非常に近く、副都心業務地区・娯楽地区の外縁部としての性格を有し、また旧来の住宅街と駅前近隣商店街の混在する地区という面を持っている。

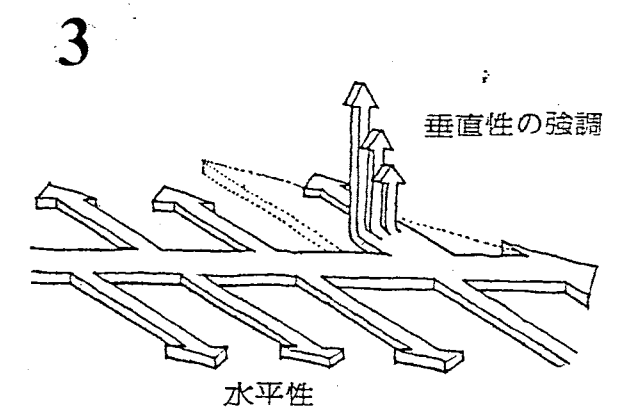
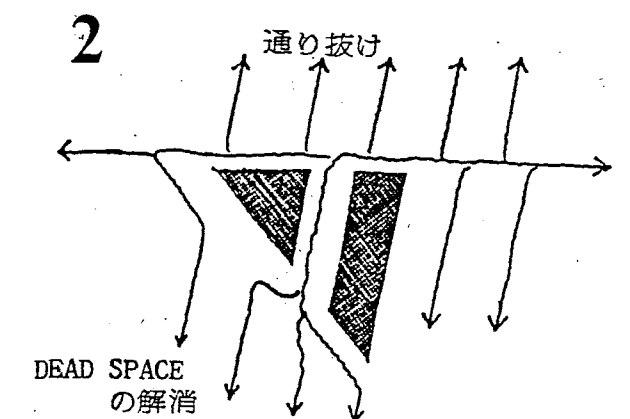
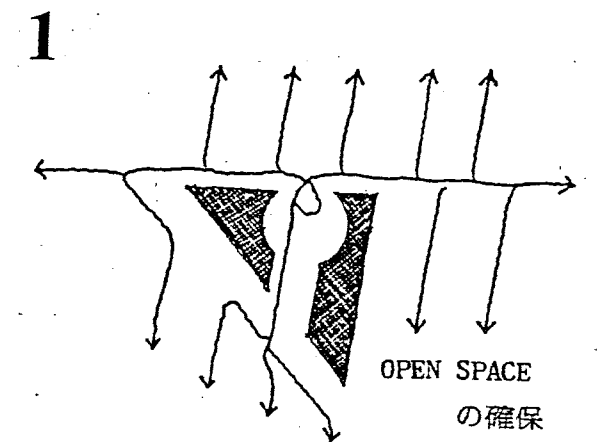
4

DEADSPACEの存在

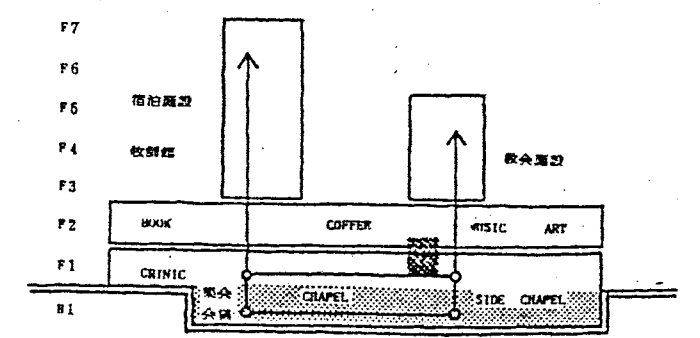
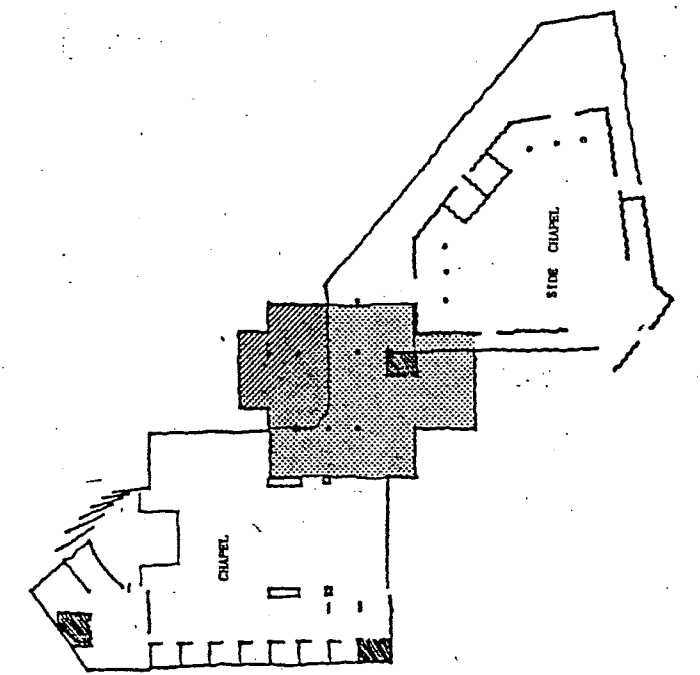


旧街道沿いの平行街路、格子状街路、および旧戸山荘の路街路より成立している。ここに山手線、総武線等の鉄道圏が敷設されることによって、通りぬけできないデッド・スペースが生じた。本計画では、教会を計画することによってデッドスペースを解消し、地域の再生・活性化を図るとともに、教会本来の使命を果そうとするものである。

大久保通りの活性化の提案



CHAPEL SIDE - CHAPEL
スタジオ 駐車場



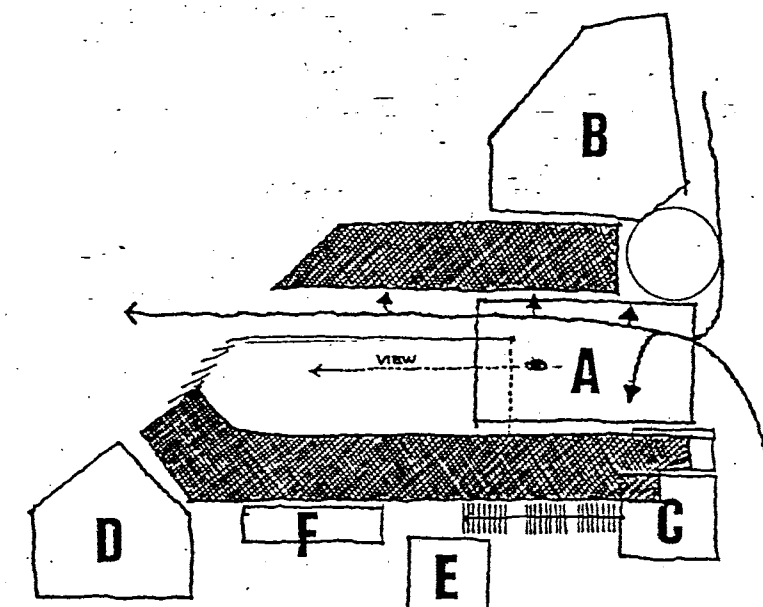
PLAN 1F

III A CONTEMPORARY CHURCH 7

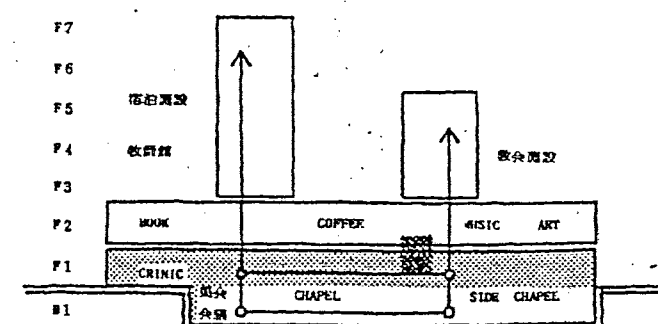
エントランスホール A B

プラザ OPEN-SPACE

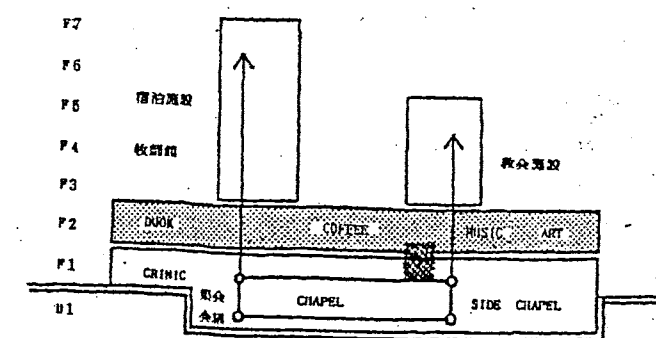
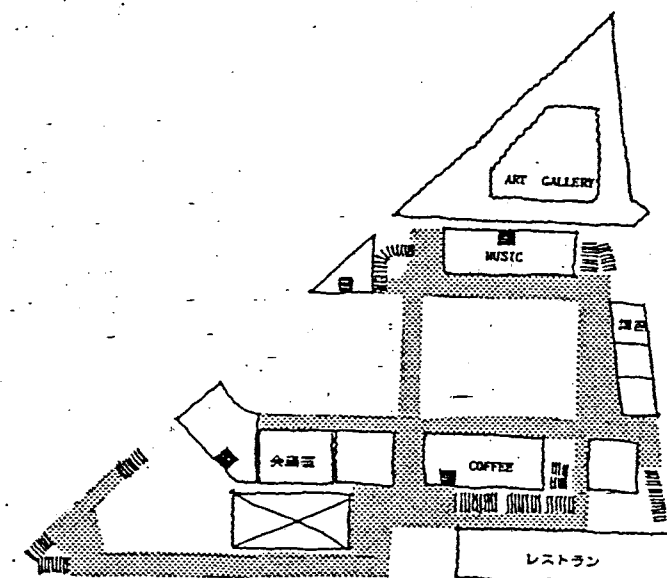
吹抜 (会堂上部) 多目的室



- A HOLY プラザ B JOY 屋外展示場
- C DEAD OPEN SPACE
- D オアシス 光庭 E HOLY 光庭
- G FOREVER 階段

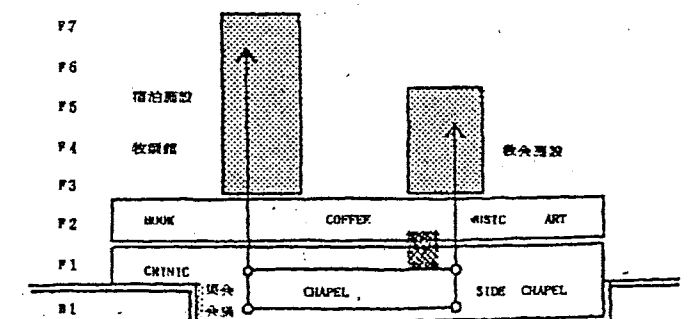
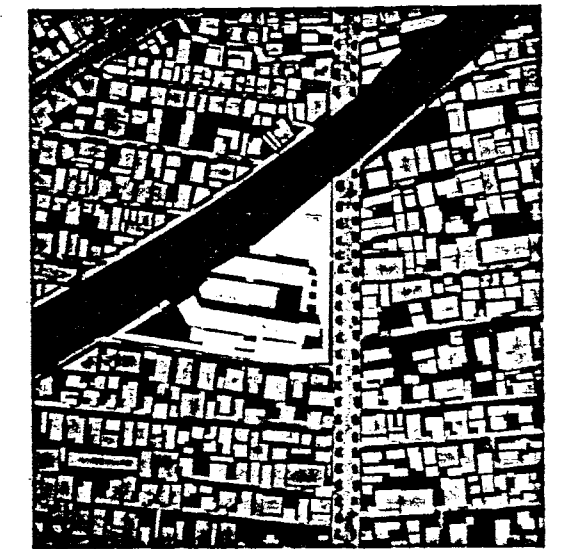


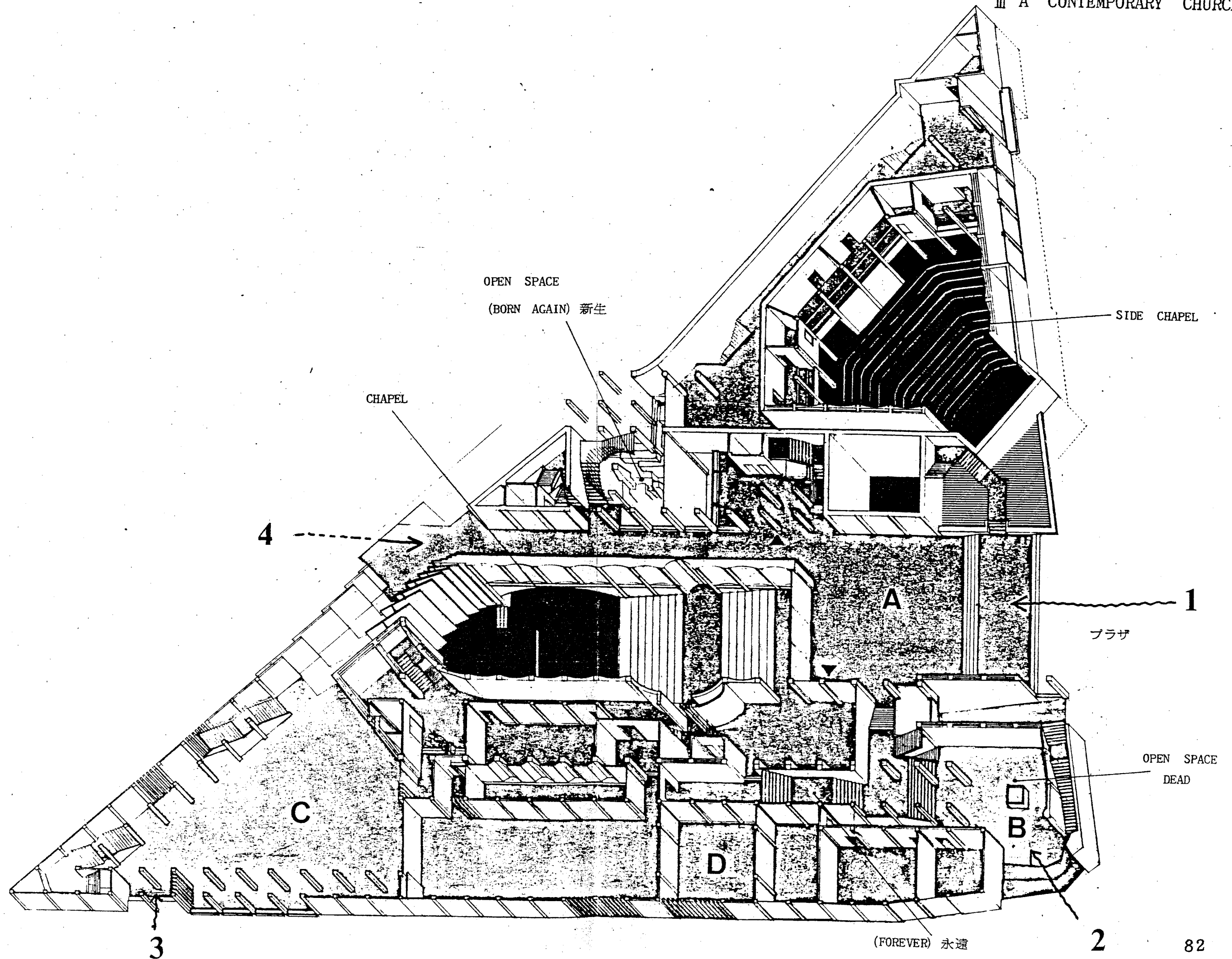
アート・ギャラリー 屋外展示
文化・教養センター ギャラリー
Music Center Coffee Shop

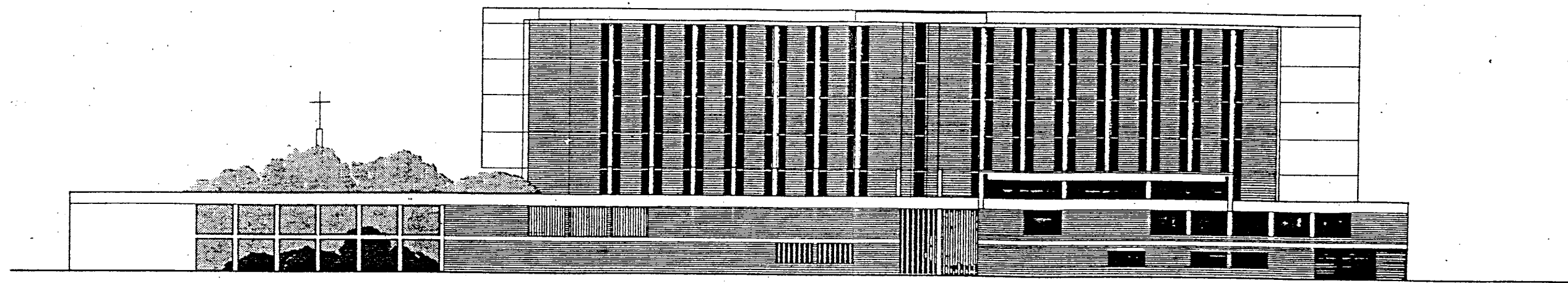


教会学校施設 牧師館

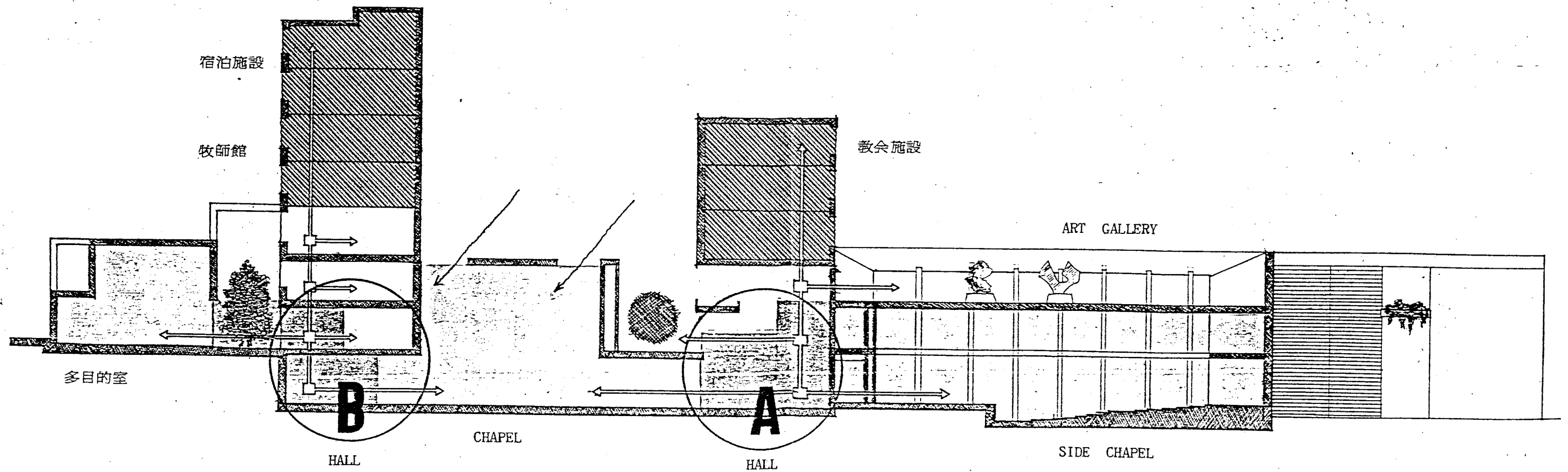
宿泊施設



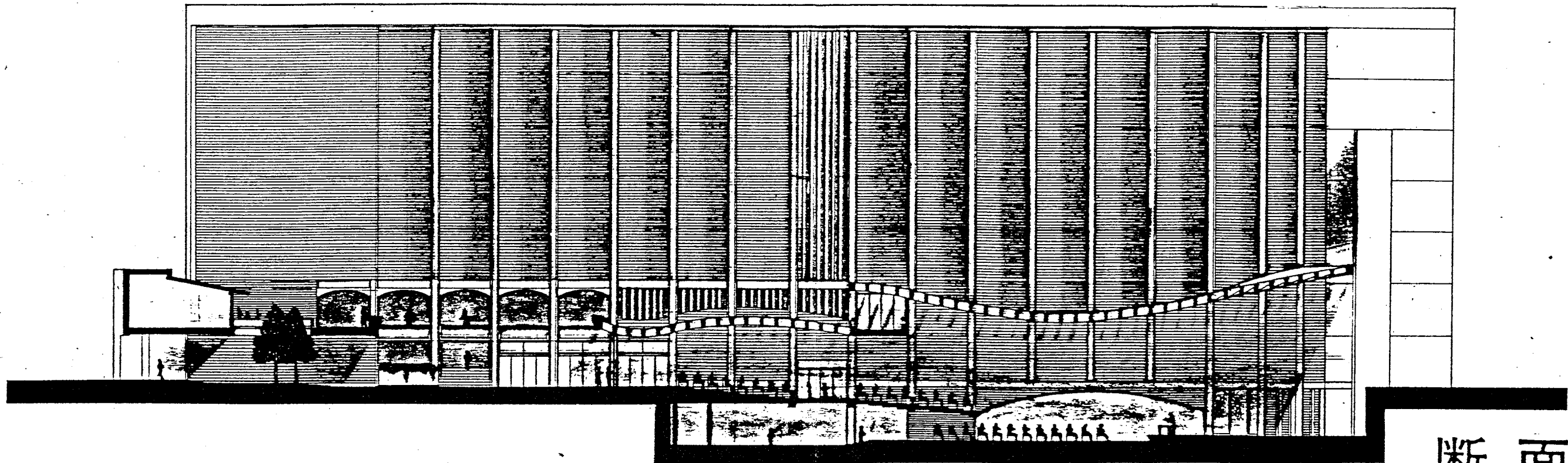




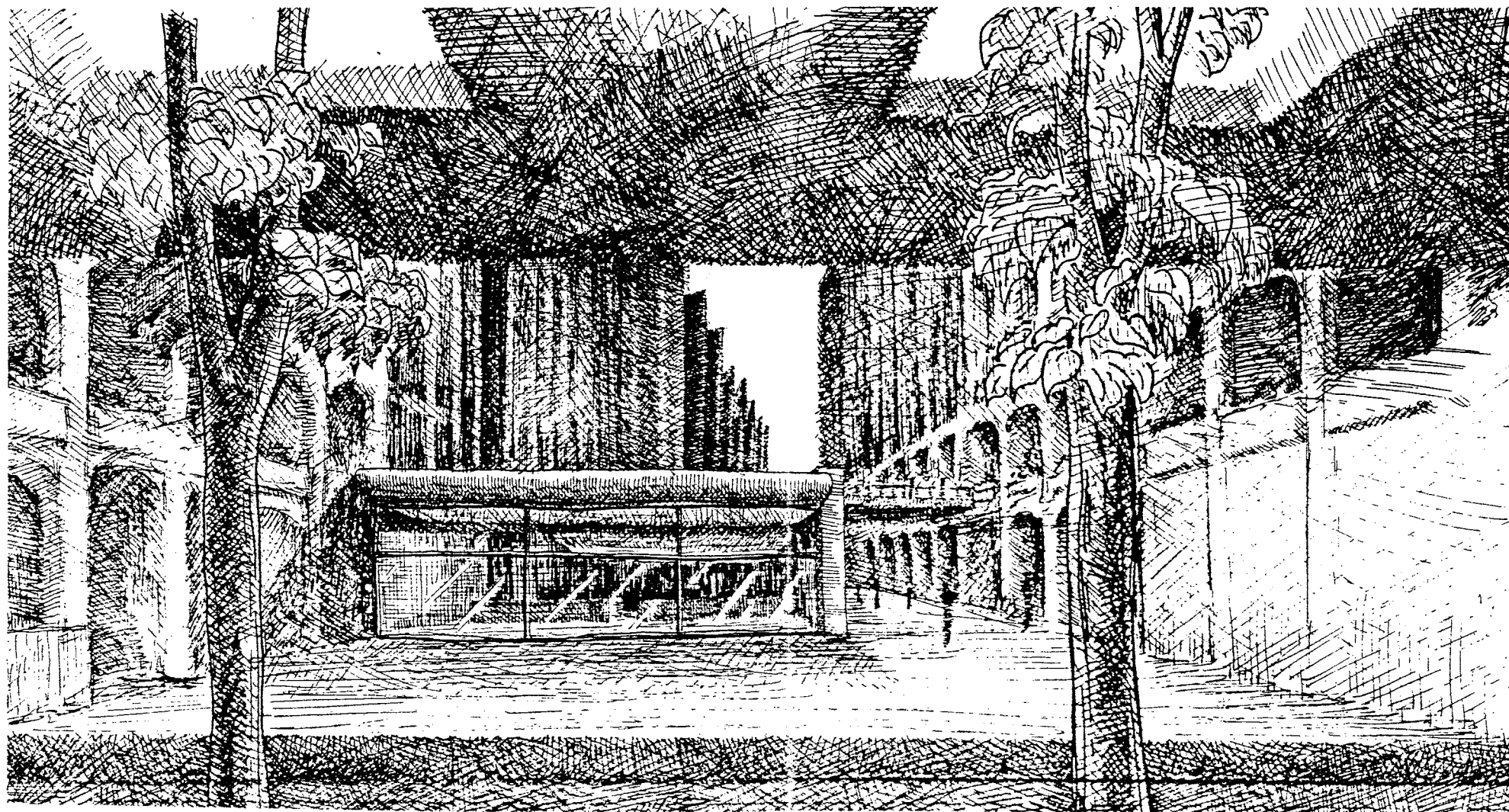
東立面図

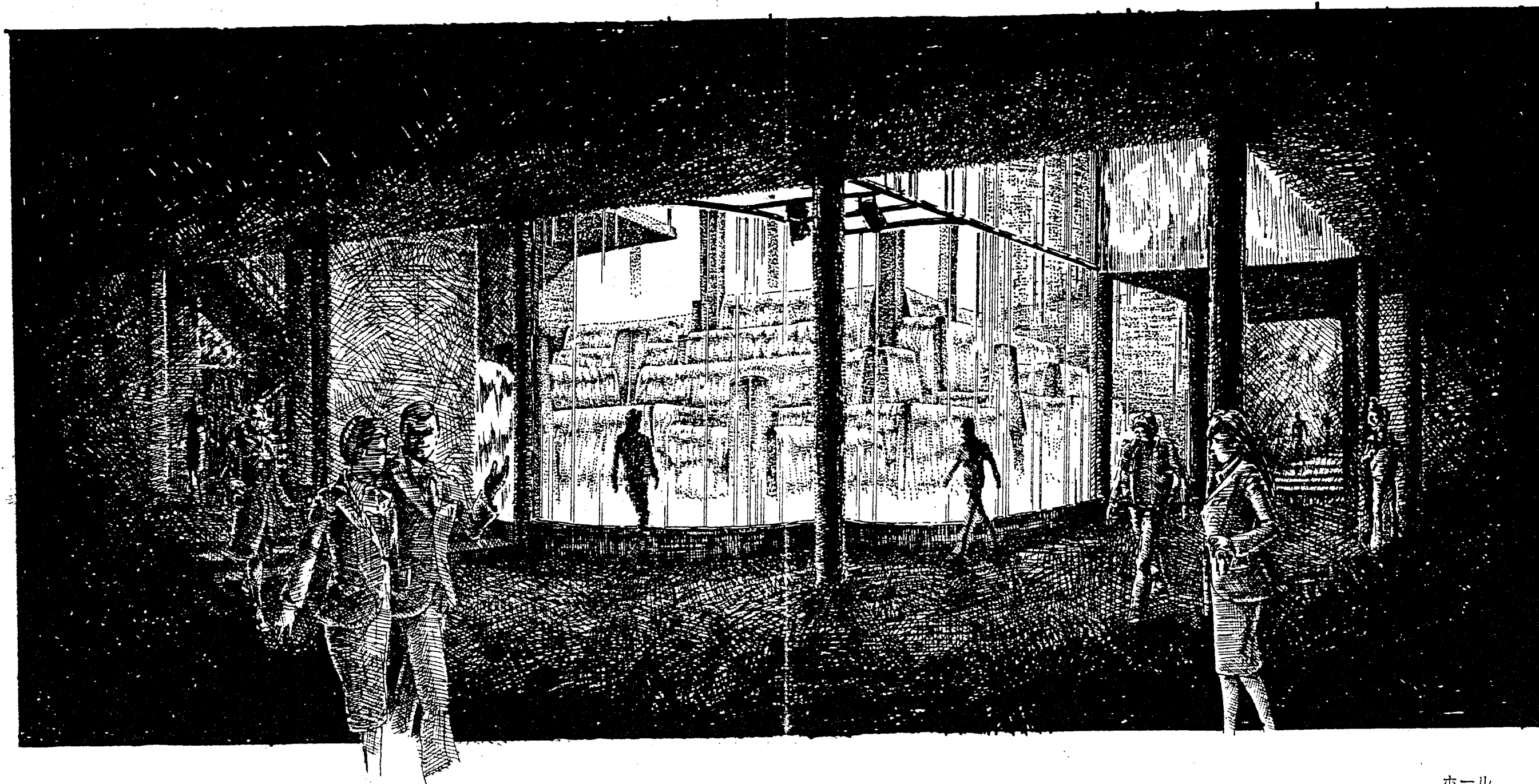


断面図

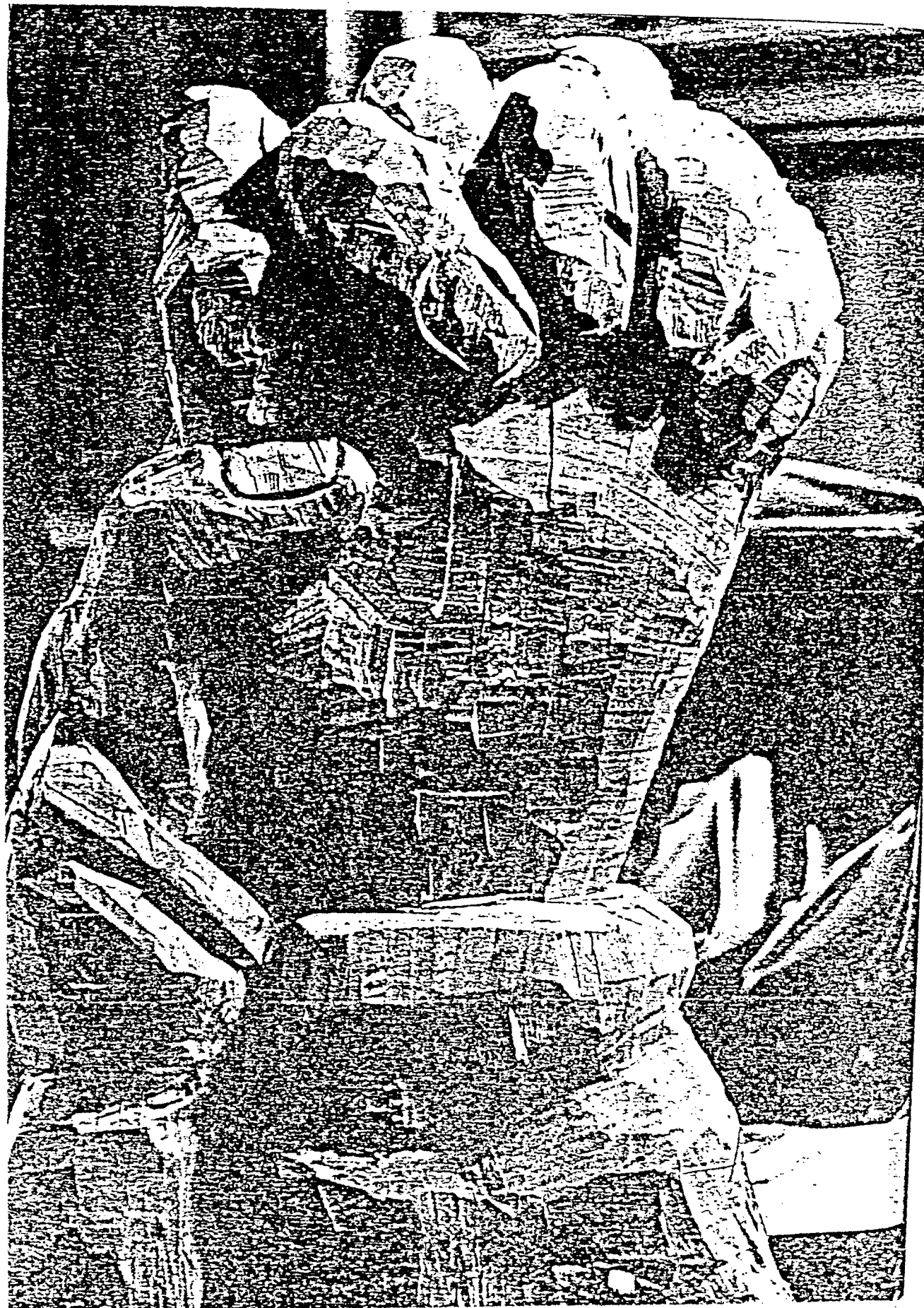


断面图





ホール



結びにかえて

クリスチャンは、日本の社会の中で小教者にすぎません。しかし、教会のもっている本質としての福音はあらゆる時代を、またあらゆる場所を通して大きな影響を人々に与えてきました。そして、やがてこの日本の中にあっても大きな影響を与えるようになるに違いありません。なぜならその福音は気づく、気づかないにかかわらず、絶対的真理として現在も現実の生活の中にあるからです。

さて、キリスト教の歴史と現代日本の精神風土を学んで得たことは、キリスト教には形態と本質があるということでした。そして考えておかなければならないこととして、その形態を一度本質から引き離し、その形態が日本の土壌に合うようにするということ、またその立地する周辺ニーズに答えられるように形態を再編成するということがありました。また教会の形態においては、その場所その場所にあって多様性があるのだと思いました。今回取り扱っ

たPROJECTの教会でもそれが言えるのだと思います。

このようにクリスチャンであり、建築学科の学生である立場から教会を考えてみました。6年間の学生生活で学んできたものの総まとめとしてこの論文が出来上がりました。この論文が出来上がるまでに多くの方々アドバイスと御協力がありました。論文指導をしてくださった伊藤鄭爾教授に、また実際の教会のPROGRAMを教えてくださいました 橋教会の峯野牧師に、また適切なアドバイスをしてくださった建築家の稲富昭先生に感謝申し上げます。また多くの時間をさいて協力してくれた後輩の伊藤君、吉田君、御堂君、東海林君、斎藤君、また聖橋教会の梶田君、松坂君、新井君、能勢君、そして長時間タイプを打ってくれた須田さんに心から感謝申し上げます。

昭和56年 初春